

白石典義初代経営学部長を語る会

日時：2020年11月24日（火）13時30分～
17時30分

場所：池袋キャンパス11号館AB01教室

登壇者（登壇順）：

西原 廉太文学部長
鳥飼 玖美子教授
松本 茂教授
井上 詔三教授
日向野 幹也教授
石川 淳教授
佐々木 宏教授
高岡 美佳教授
尾崎 俊哉教授
柴 良治氏
加藤 睦教授
吉井 昭一氏
松本 元氏
白石 弘子氏

司会：山口和範経営学部長

1. 開会

山口 「白石典義初代経営学部長を語る会」を開始いたします。進行役を務めます経営学部長の山口です。よろしく願いいたします。

本学の伝統に従い、開会の祈りからスタートしたいと思います。西原廉太文学部長をお願いしたいということで相談したところ、本日、名古屋へ出張ということで、動画を用意していただきました。それを冒頭で流し、会を始めたいと思います。

2. 西原廉太文学部長

西原 それでは、会を始めるに当たり、一言お祈りをさせていただきます。まずは、白石先生を思

い出し、短く沈黙いたしましょう。天の内なる神様、私たちは今、あなたのもとに召された白石典義先生を思い出し、語る会を持とうとしています。どうか、この会をあなたがお守りいただき、私たちのさまざまな思いを分かち合うことができますように、どうぞ導いてください。この祈りを、尊き主イエスキリストの御名を通して御前にお捧げいたします。アーメン。

山口 続きまして、これより会の本題に入りたいと思います。冒頭、西原先生からメッセージを寄せていただきました。皆さんのお手元にある資料は、立教大学の経営学部が発足して最初の、2006年の新入生ウェルカムキャンプのときの資料です。そのときに、白石先生が西原先生をお呼びして、立教大学の経営学部のスタートに当たって講演をお願いしたという経緯があります。これについては、たぶん後で尾崎先生のほうから、その経緯等もお話しただけのではないかと思っておりますが、そのこともあり、今回会をスタートするときに西原先生に一言お願いしたいということでメッセージを寄せてもらいましたので、まずはそれをお聞きください。お願いします。

西原 皆さん、こんにちは。文学部の西原廉太と申します。本日は、経営学部の白石先生を語る会にお招きいただき、感謝申し上げます。残念ながら所用のために何うことはできませんが、山口先生から、ビデオでもということで、このような機会を与えていただきました。

私は1998年に立教大学に着任しましたが、そのときから白石先生のお名前はいろいろな形で耳にしていました。今後の立教大学を背負っていかれる大変重要な存在であるということを認識して

いましたが、一末端の文学部の教員からしますと、ちょっと怖いといいますが、すごく力をお持ちで近寄り難いというようなイメージを持っていました。

ところが、経営学部が立ち上がる時でした。白石先生から私にお声がかかりました。「西原さん、ちょっとお願いしたいことがある」ということです。それは何だったかと申しますと、ちょうど経営学部が2006年に開設される際に、経営学部1期生として入学してくる新生を代々木のオリンピックセンターに集めて、ウェルカムキャンプをやるのだということで、そのことに私は驚いて、「そんなプログラムを持たれるのか。さすが新しい学部の考えることは違うな」と感心したのですが、そこで、何と私に、1年生に向かって経営学部と建学の精神の関係について話をせよというお達しでした。

実は、私はちょうど研究休暇をいただいたときだったので、正直、研究休暇のときにはあまり仕事を受けたくないなと思った面もあったのです。しかし、何よりもあの白石先生からの直接のご依頼ということで、また、新学部の立ち上がりの大事なプログラムの中で建学の精神をお話しさせていただけるという機会は本当に光栄に思いましたので、実際に私も2006年4月7日の立教大学経営学部の新入生ウェルカムキャンプに参加させていただきました。

実はこちらに、そのとき新生に配っていたレジュメがあります。これを久しぶりに読み、私が話していることは昔も今も変わらない、あまり進歩がないなと思いましたが、その中で私がハイライトしていることは、当初から立教大学は国際的教養人の育成が主題であったというお話。それから、聖公会という教会は、あらゆる絶対主義、原理主義を拒否するところにある。いわゆるプロテスタントの極端な個人主義を否定し公共性を重要視するのが聖公会の伝統である。

したがって、コミュニティにおける大学、病院、社会福祉、経済活動などには教会が責任を持つという理解が根底に流れている。そして、時空を貫く立教大学とその理念がまさしく経営学部に至っている。普遍的真理を探究し、この社会のために働く者を育てることが、立教のまさにミッションである。そして、「エコノミー」という言葉の語

源はギリシャ語の「オイコノミア」「オイコス」という言葉にあるわけですが、神の家（オイクメネー）は全てのものの尊厳が守られる世界。そのために社会のシステムを整えることが、本来の経営、経済の務めであるということですね。

また、世界の聖公会は、5世紀、6世紀のケルトや、カンタベリーから21世紀の立教まで歴史がつながっていて、世界に広がるつながりを持っている。このようなインターナショナルなネットワークを早稲田も慶應も持っていないわけです。

そういう意味で、立教大学の学生がこのネットワークを生かさなない手はない。したがって、国際社会を担う教養、グローバルバリュー、英語力を持つビジネスリーダーを養成するのは、立教大学にとってある意味必然であったのではないかと。立教大学の経営学部はこのような歴史的つながりを有する大学の中に設立された。これは他の大学の経営学部には決してまねができないことである。そのような話をさせていただいたことを、改めて確認いたしました。

そして、白石先生を中心に始められた経営学部が、2006年から14年を経て、今や、皆さんご承知のように、押しも押されもせぬ立教大学の看板学部になられた、立教のトップランナー、ブランドになられた。白石先生をはじめ経営学部を構想された皆さんの先見の明と情熱、そしてまた、立教大学にはなかった新しい試みに大胆にチャレンジしていかれるパイオニア精神が、今の皆さんの経営学部をつくられたのだなど、ある意味とても感慨深く思い出した次第です。

ちなみに、代々木のオリンピックセンターのウェルカムキャンプで、私は度肝を抜かれたことがあります。学生たちがホールに集まっていて、司会をなさっていたのが尾崎先生だったと思いますが、尾崎先生の名調子の進行の中で、「白石経営学部長がご入場」とおっしゃったか、入ってこられるということをおっしゃったら、後ろのほうのドアにスポットライトが当たり、そこから白石先生が手を振りながら入ってこられた。ロックスターのように。これは時代が変わるのだなどという驚きとともに、非常に感銘を受けた次第です。

そして、その会が終了して学生たちがホールから出ていくわけですが、白石初代学部長は一人一人と握手をされるのです。そして、プレッジ

カードというのか、それを一人一人に手渡していかれる。そうやって最初から白石先生は経営学部の学生一人一人に、いわゆる帰属意識、アイデンティティといいますか、そのようなものがある意味イニシエートされていたと思います。

この伝統は、恐らく今も経営学部はお続けになっているのだらうと思います。山口学部長なども、このコロナの状況の中でも、一人一人とZoomでお話しされたと伺いました。文学部のようなマンモス学部、しかも学科がバラバラに存在しているようなところでは、なかなかそれが実現しません。しかし、今後はこの経営学部モデルが立教大学のスタンダードになるべきだと私も思っているところです。

それから、2010年に吉岡知哉先生が立教大学総長にご就任になった際に白石先生は統括副総長になられましたが、私も副総長としてキャビネットに加えていただきました。2010年以来、この年に至るまで、私は最後のほうは学部長になりましたので総長室から外れましたが、事実上およそ10年間、白石先生とは立教大学の総長室の中で一緒に働かせていただきました。

その中で私が白石先生から学んだことは数知れないわけですが。白石先生のリーダーシップのとり方や責任のとり方、あるいは方向性の打ち出し方。もっと言うと、日ごろの身だしなみですね。これは決して小さなことではないということを、白石先生はとても大事にされていたと思います。そういう細かなところに至るまで。また、とてもやさしいのですね。一見こわもてで、「おいおい」と思うような場面も、もしかすると一般教員にはあったかもしれません。しかし、実のところ、本当にやさしい方でした。

何年前だったか、私が副総長の最後のほうだったので4年ほど前だったと思いますが、GLAPを立ち上げる際に、海外協定校を増やさなければならないということで、アメリカのサウス大学(University of the South)に、白石先生と国際センターのスタッフの辻さんと3人で行きました。そのとき、本当にゆっくりとじっくりと、プライベートなことも含めてさまざまお話をすることができ、とても人間味のあるやさしい白石先生と接することができて、私にとっては大変忘れ難い思い出です。

また、息子さんの白石経君は、実は私の教え子であり、ゼミの学生でありました。そんなことで、白石先生からは時々、「廉太のところに人質を取られているから、ちゃんと面倒みてくれよ」ということで、経君のことをいつも気にかけておられたし。そして、自慢の息子でしたね。経君がalmaというグループでエンタテインメントの世界にメジャーデビューされました。その際も、本当に喜んでいらっしゃって、私にいろいろな情報を教えてくださいました。私もとてもうれしかったので、白石先生と経君のことはしょっちゅう盛り上がっていました。そんな思い出もあります。

理事長としてまだまだお働きいただきたかったところですが、白石先生が愛された立教、また、白石先生が立教をどのように考え、これからどのようにしていかれたかかったのかを、私自身も心に留めながら、私達も白石先生の後をたどりながら、白石先生の思いを共に育て上げていきたいと思います。白石先生の魂の平安と、残された私たち、ことにご家族、また経営学部の皆さんに慰めがありますように、お祈りいたします。本日はありがとうございました。

山口 それでは、ここから2つの部に分かれて、前半は経営学部設立に向けた思い、後半が体育会活性化への思いということで、白石先生がお考えになっていたことについて、それぞれ、白石先生とゆかりの深い先生方からお話をいただければと思います。

まず、冒頭をお願いしたいのが鳥飼玖美子先生です。鳥飼玖美子先生は、たぶん全カリがスタートするときに、立教大学の言語教育の改革を白石先生と共に実現された先生です。経営学部で今のBBLプログラムを推進していくというときに、たぶん一番相談された先生が鳥飼先生ではないかと思っています。それでは、鳥飼先生、よろしく願いいたします。

3. 鳥飼玖美子教授

鳥飼 白石先生、というか、いつも「白石さん」とお呼びしていましたが、白石さんとは、私が立教大学に着任する前日に初めてお会いしました。明日から立教大学教員としての生活が始まるというときに、その当時はまだ白石さんは全カリの英

語教育研究室の主任をなぜかなさっていて、その関係でお目にかかったのですが、さすが立教の卒業生だけあって、立教の歴史であるとか、どこへ行ったらおいしいものが食べられるとか、そういうことまで含めていろいろ教えてくださいました。

それ以降、まずは全カリの立ち上げと一緒にお仕事をさせていただきましたし、あとは独立研究科。この独立研究科には、ビジネスデザイン研究科、21世紀社会デザイン研究科、そして異文化コミュニケーション研究科と、3つ同時に立ち上げたのですが、私は異文化コミュニケーション研究科を立ち上げるということで、この独研についてもいろいろお世話になりました。

ご承知かもしれませんが、全学共通カリキュラムは大変な大改革でしたし、独立研究科も初めてのことで、いずれも学内では相当な闘いがありました。そのときに、この2つの大きな立教大学での動きを通して、白石先生の物事の取め方を間近に拝見しました。そのとき思ったのは、この人の調整能力はすごい。学内でやはり対立するわけです。そうすると、こちら側へ行って説得し、こちら側と話し合っ、何とか着地点を見つけようとする。その粘り強さですね。

そのときに耳にしたエピソードですが、なんでも小さいときから交通整理が大好きな方で、本当に小さいときから近所の道路の交差点に立って、そのころお巡りさんがやっていた交通整理みたいなことをずっとやっていたということです。さすがに交通整理が上手です。

その後、経営学部を立ち上げるという。これもたぶん、白石さんがお考えになったことだと思うのです。経営学部を立ち上げるときの白石さんの取り組み方を見ていて、この方は単なる調整型の人間だけではないということがよく分かりました。白石さんは、経営学部を立ち上げるときに、私にも手伝ってと言われたので、お手伝いしたのですが、結論を最初に申し上げてしまうと、最初から大きなビジョンを描いている。そして、そこに到達するまでに120%、150%の努力を傾注する。そういう方だったのがよく分かりました。

具体的に申しますと、新学部、新たにつくるのも大変ですが、既存の学部にある既存の学科、2つ別の学科を持ってきて一緒にするのは、かえって大変なのですね。それも見ていて、「うわあ、

大変だな」と思いましたが、細かいところまで、ご自分が考えた目的に向かって手を打っていくのです。その1つが英語でした。白石先生の考えでは、立教大学に本当の意味でのグローバル人材を育てる学部をつくる、そして彼は「リーダーシップ」という表現を使ったのです。本当に世界のリーダーになるために必要なこと、それを経営学部で教育するのだ。その大きな1つが、国際共通語である英語であったのです。これは本当に学部の軸になるものだから、妥協はしないということです。

それで、どのように持っていったらいいかというご相談を受けて、私は、ありきたりの、いろいろな大学でもうやっているような communicative approach なんていうのはつまらないので、リーダーシップということなら、内容のあることを英語で発信できる人材。そのためには、当時はあまり知られていなかったかもしれませんが、content-based teaching (CBT) と言う、北米で始まったものですが、内容重視の外国語教育です。

どういうことかと言うと、それまでの外国語教育というのは言葉にだけ目を向け、あれを教え、これを教えとやるけれども、なかなかうまくいかない。そうではなく、むしろ中身を教えるときに外国語を使う。そうすることによって、付随的に外国語の能力もついてくる。そういう新しいアプローチだったのです。この説明をしましたら、「それいいね」ということで、私は文献も教えたのですが、「こんな本を読んでいるより行ってみよう」と言うのです。「本当に行くの?」と聞いたら、カナダの大学まで行こうという。その当時は、アメリカでもやっていましたが、カナダが一番進んでいたのです。カナダの大学を視察しようということ、一緒に行きました。

そこで、本当に行ってよかったなと思ったのは、論文などを読んでもなかなか分からない部分が、実際に行ってみて授業を見学し、担当している先生方の話を聞いているうちに、だんだん本音が出てくるのです。白石さんはそういうのを引き出すのが上手ですから、お酒なんか飲みながら、「本当は大変なんじゃないの?」みたいなことで引き出すのです。そうすると、「いや実は、専門科目と外国語科目を結び付けるというのは、言うは易くで、実は大変なのだ」という話を

聞くことができました。

往々にして、専門の教員のほうが突っ走ってしまい、言語教員はあたふたとそれを追いかけてお手伝いするようになってしまう。それではうまくいかないだろうということで、いろいろ考え、カリキュラムをつくったのですが、全体のカリキュラムと一緒にGP（Good Practice 優れた取り組み）という文部科学省の競争的資金に応募しました。このときの白石さんの取り組み方は必死で、本当に徹夜して書いていました。

私は英語カリキュラムだけをお手伝いしましたが、全体を、新しいタイプのリーダーシップ人材ということに絞って書いたのです。結果的にそのGPは採択になりました。それが大きな弾みになりました。今日は探せなかったのですが、恐らく、あのときのGP申請書を読むと、そのときも思いましたけれども、今の原型が全て入っています。今の経営学部が成功したのは、あのときに白石先生が大きなビジョンを描いてロードマップを全部つくったからです。それを実際に行っていたので、こんなにうまくいったのではないかと思います。

それと、白石さんがこだわったのは人事です。どういう教員を集めるかということで、英語はやはり、本当にいい人に来てもらいたい。誰がいいだろうということで、私はいろいろ考えたのですが、実は、GPを申請したときに、content-based teachingの部分について非常に鋭い指摘をした審査員がいました。文部科学省から依頼されて審査を行った審査員がいて、その方の意見が非常に良かったので、この人に来てもらいたいと思ったのです。その名前は公表されないのですが、たぶんこれは私の知り合いの彼だろうと見当をつけました。

その話をしたら、ぜひその彼を捕まえてほしい、連れてきてほしい。その彼というのは松本茂先生ですが、前から存じ上げていて、今いる大学をもう出たいと言っている、という噂を聞いたので、これはいいと思い、会ってみたら、「別にそんなつもりはない」とのことで、がっかりしたのですが、「あきらめないで欲しい」と白石さんから言われ、押ししました。「ぜひ来てほしい」と。そのときにグラグラしている松本茂さんにあてた白石さんの手紙がすごいもので、学部長予定者からのラブレターですよ。それが達筆で、本当に

素晴らしい文章だったのです。こういう文章を書ける人なのだということを初めて知りました。そんな手紙が学部長予定者から行ったら、さすがに松本茂さんも断るわけにはいかずに、来ていただきました。そして、GPのときに自分が審査員として書いたコメントを、そのとおりに生かしながら、内容重視の英語カリキュラム、優れたものをつくっていただきました。

そういう経営学部の立ち上げに対する情熱と意気を見ていると、白石さんという方は単に、最初に私が感じた交通整理の上手な人というだけでなく、ビジョンを持って努力する方なのですね。全てにおいて努力する方でした。一見、先ほども少し話が出ていましたが、強気なのですよ。ちょっと生意気なところもある。それで自信満々に振る舞うのです。それで、時々、奥さまの弘子さんから、「そうやって威張ったような言い方をしちゃ駄目なのよ。実った穂は頭を垂れるの」とのことで、「また言われちゃったよ」とおっしゃっていましたが、実は立教の中で、白石さんのそういう態度を見て不快に思った人は、あまりいないと思います。本当に傲慢だったらいやなやつですが、白石さんはそうではない。傲慢ではないのです。ただ明るくて積極的で前向きで、そして笑いをちりばめながら、強引に進んでいくところもあるのですが、西原廉太先生がおっしゃったように愛情があるのです。そこに深い愛情があるのが分かります。ですから、言い合いをしていて、「なんなんだよ、玖美ちゃん」とか。私を「玖美ちゃん」と呼ぶ人は、日本の中で白石さんだけです（笑）。しょっちゅう「玖美ちゃん」と言われていましたが、そこに、人間に対する愛情というものが分かります。

それから、白石さんの愛情はやはり立教なのですね。自分が卒業したこの立教大学をこよなく愛していた。そして、立教大学が世界で並び立つ大学になるために、経営学部のような学部が絶対に必要だという思いは、強かったと思います。だからあれだけ必死になって努力をしてつくり上げたのだろうと、今になって思います。そして、その白石さんの思いが実って、「今や看板学部」と西原廉太先生がおっしゃいましたが、本当に、カリキュラムの優れた学部で知られ、入学した学生たちの満足度が高い。そして優秀な人材を出してい

る。こういう結果を見ると、あのとき本当に大変で、国際センターが「えっ、留学をまたやるのですか。追いついていかれません」なんていうのを、「だったら学部でやる」という感じで努力を重ねた、それが実ったのだと思います。

そういう意味で、私は今日久しぶりに立教大学のキャンパスに来ることができ、経営学部のことを思い出しながら、本当にうれしく思っています。これからも経営学部は、白石先生の夢の思いを生かしながら、まっすぐに進んで、立教大学を世界の立教大学にさせていただきたいと願っています。どうもありがとうございました。(拍手)

山口 鳥飼先生、どうもありがとうございました。それでは、松本先生は今日、名古屋のほうで英語教育に関する仕事があり、出席できませんので、高岡先生から松本先生のお手紙を、よろしく願います。

4. 松本茂教授

高岡 それでは、代読させていただきます。白石典義先生へ。今日は出席できず残念です。申し訳ありません。それにしても、僕らを残してさっさと帰天されてしまって、後は頼むと手を振ってってしまった先生の笑顔が浮かびます。でも、67歳。いくら何でも早過ぎます。先生が愛する立教をもっと素晴らしい学び舎にさせていただくの、もう少しご尽力いただきたかったです。個人的には、学部創設の2年近く前からお声がけくださり、感謝しています。

私は今年度末で定年退職です。時がたつのは早いものですね。先生にお誘いいただいていたおかげで、15年間にわたり充実した日々を過ごすことができました。少しはお役に立てたでしょうか。成績はSとは言いませんがAはいただけるでしょうか。学部創設の前に先生からのお誘いを何回かお断りすると、「アジアナンバーワンの経営学部にするために君の力が必要だ。ぜひ着任してほしい」というお手紙をいただき、感動したことを、今でも覚えています。着任後しばらくすると、「まっちゃん、あの手紙はうちの弘子に、これでいいかなと読んでもらってから、出したんだよ」とニコニコしながらおっしゃっていましたね。

ご生前、何度も食事をご一緒させていただきま

したが、先生はお酒が進むと、必ずと言っていいほど、ご自慢の奥さまとの楽しいひと時についてのお話をしてくださいました。また、お酒といえ、大分県別府への視察に小坂先生と私が同行させていただいたときのことを思い出します。視察が終わって宿にチェックインし、畳の部屋で先生と一献交え、学部の将来のことを熱く議論させていただきました。今となってはよき思い出です。

学部教育については、先生がBBL (Bilingual Business Leader) プログラムを学部のコアカリキュラムの1つに位置付けてくださったおかげで、他大学の経営学部や商学部とは異なり、英語教育が下請けにならず、英語と経営学の学びが融合する内容になったと確信しています。そのBBLプログラムについては、主査の小生が思い描くようにやらせていただきました。そして、私の研究室に月に数回はふらりとやってこられ、「どう?」と声をかけて気遣ってくださいましたね。いつもとても励まされました。

先生が明確なミッションとビジョンを提示されて礎をつくってくださったおかげで、経営学部は立教の看板学部になりました。そして、そのことに、歴代の学部長および教職員、スタッフは満足せず、「アジアナンバーワンの経営学部を目指す」「改革なきところに進歩なし」「自分よりも優秀な教員を採用せよ」という白石スピリットが継承され、日々進化しています。今後も天からサポートし続けてください。どうぞ安らかにお眠りください。経営学部 BBL 主査、松本茂。(拍手)

5. 井上詔三教授

山口 ありがとうございました。続きまして、経営学部設立前から立教大学社会学部産業関係学科にいらっしゃって、一緒に経営学部を設立する立場にいらっしゃいました井上先生から、白井先生について語っていただきたいと思います。よろしく願います。

井上 こんにちは。井上詔三です。こんなに大きな教室で、こんなに少ない人を前にして話すのは、何十年ぶりか、あるいは初めてぐらいだと思います。

学部がこの会を実現したことを大変嬉しく思います。この場でお話をする機会を与えてくださ

り、ありがとうございます。大変名誉であり喜びであります。今日は、白石さんにお会いして以来、お別れするまで、その時間の経過を4つに分けてお話しします。後半の初代学部長以降については皆さんも良くご存じでしょうから手短にします。

i. 「白石青年」時代

初めに「白石青年」時代です。私が白石さんのことを「白石青年」と呼ぶのは、彼が産関の大学院後期課程生であった時に会ったからです。立教大学産業関係学科（産関）は、アメリカの大学院で実践されていたカリキュラムを手本としていました。産関開設時の先生方の中には、アメリカで学位を取られた先生が数名いらして、ビジネス・スクールのカリキュラムを導入しようと企画された方もおられました。ただ、日本ではビジネス・スクールは時期尚早ということで、産関関係論を中心に据えた学科にしたと伺ったことがあります。ビジネス一辺倒ではなく、産業界における行為主体の諸関係を経済学、社会学、心理学ほか、学際的にアプローチする特徴を備えています。

「白石青年」は、産関の支柱の一本であるマクロ経済学を担当しておられた西山千明先生の研究室で研鑽していました。西山先生は、シカゴ学派の経済学を修め(Ph.D.)、日本の金融政策に影響を及ぼす論陣を張っておられました。その西山先生が、経済資源のカネからヒトに研究対象を広げ、「人的資本理論」に取り組んだことがあります。当時の通産省の産業研究所の支援を得て「人間資本に関する総合的研究」というプロジェクトをスタートされました。アドバイザーとしてはシカゴ大学のGary Becker先生を立教に招聘しました。当時、人的資本理論の理論的系譜と実証研究の日本での先達は慶應大学の佐野陽子先生でしたので、共同研究者として佐野先生を迎えられました。私は佐野先生の門下生でしたので西山プロジェクトに同行し、「白石青年」と出会うことになったのです。

院生として育ち盛りの「白石青年」は、このプロジェクトに参加したことで、研究チームのマネジメントとプロジェクトのマネジメントを見事にこなす恩師の行動から多くを学びました。後に立大の教員として、更に後には学院の管理者として活躍する上で重要な三つの収穫を得たと私は見て

おります。一つ目：研究者として専門分野を確立して安住せず、更に研鑽し隣接領域にまで守備範囲を広げていく努力をし続けること。二つ目：後にノーベル経済学賞を受けるような世界トップの研究者と意見を直接ぶつけ合う英語力と議論をリードする力が必須で、専門書や論文を読んで理解する英語力だけでは足りないこと。三つ目：教育はヒトに対する投資であり、費用・便益の経済計算に見合うサービスを学生、父兄、社会に提供し続けなければ学問は淘汰されてしまうこと。

そして、産関を開設された第一世代の先生方から、いずれはビジネス・スクール型のカリキュラムを充実させたいという思いを学部生の頃から伝えられていたので、産関を発展させていく方向をかなりはっきりと見すえていたはずでした。後に経営学部を開設されますが、英語による専門科目の学習、ビジネス・リーダーシップを身につけるアクション・ラーニング、多様性の尊重など、経営学部で学んだ学生が教育投資への大きな見返りを手にする仕組として具体化したことになります。

「白石青年」は立大院でこうした大きな収穫を手に入れます。ただ、院生時代の最大の収穫はまだ別にあります。それは、立大の大学院にいらした弘子さんを間もなく射止めようとしていたことです。白石青年はいつもニコニコしていて、幸せいっぱいの顔をしていました。その源が弘子さんだったのです。

ii. 産業界関係学科時代

その後白石さんに再会したのは、25～26年も経ってからです。2000年に私は産関の教員公募に応募して採用されたのです。再会当初は、西山プロジェクトに参加したりサーチャーの卵だった当人であるとは全く気がつきませんでした。白石さんは学科長になっていて「おまえを雇ったのは私だ」と、事あるごとに恩着せがましく言い、上司としての立場を楽しんでいました(笑)。歌舞伎座の花道沿いの席で奥様にお会いした時は「部下の井上だ」と紹介されました。弘子さんは「そんなに威張るものではない」と目の前で白石さんをたしなめるのですが、彼の大きな態度は少しも改まりません。西山プロジェクトで苦勞を共にした仲間だったからでしょうか。白石さんが弘子さんにプロポーズして結婚のOKをもらったのが、

正門のクリスマスツリーの下だったという公然の秘密を、私も知っていたからでしょうか。白石さん流の、良い人間関係を築きあげる努力の表れだったのかもしれませんが。

開設後40年近くたった産関は「プロダクト・ライフサイクル論」のいう成熟期をとうに過ぎていて、衰退期にあるように見えました。産関がお手本にしたアメリカの大学では、学部も大学院も次々と産関という看板を下ろし、経営学重視のカリキュラムに舵を切っていました。マーケティング理論に従えば、立大産関も新しい価値を提供するイノベーションを求められていたのです。白石さんは産関の卒業生ですから、誰よりも強く産関を改革したいと望んでいました。

産関改革で白石さんが長年抱いていた案に、英語重視の教育があります。その方向で新しいカリキュラム案が形になりかかった時、白石さんにUCLAのビジネス・スクールへ留学する機会が巡ってきたそうです。MBA (Finance) を修得して帰国した時には、その改革案がすっかりしぼんでいてがっかりしたとのことでした。残念な思いをし続けていたところに、たまたま私が産関に飛び込んできたことになります。英語重視の教育で社会の求める人材を産関から輩出する、社会から評価される学科になれば産関に対する学内の評価も高まる、そうした熱い思いを聞いたのは、立教通りの寿司屋の2階でした。

『英語重視の学科にしたい。必要ならば「産関」という名前を無くしてもいい』という案に、『いいですね！ やりましょう。やりましょう。』と私は答えました。その時もう一人『やりましょう』と言った先輩教員がいました。彼も私も移籍組、産関生え抜きは白石さんだけでした。学科名を変えとなれば産関OB・OGの説得は自分がやる、と白石さんが言うので、新学科の設計には自由度が増しそうな気がしました。

たまたま私は前任校で英語と日本語で経営学を学ぶバイリンガル・プログラム（国際経営コース）に所属し、中京地域の世界企業が卒業生を喜んで雇ってくれることを体験していました。産関をベースに新しく英語重視のカリキュラムを発展させるとなると、「国際経営学科」とでもいうようなところに落ち着くかなと思いつつ、東京で経営学のバイリンガル教育を開設したら、日本の

企業ばかりでなく外資の東京支社が喜んで学生を採りにくる、『きっと成功しますよ』と白石案に太鼓判を押しました。

こうして産関の改革は3名で動き出しました。白石さんの熱が一番高く、『やりましょう』と2回繰り返した私が2番目、1回しか言わなかった先輩教員が3番目の熱さということでした。英語重視というとき、単なる英語力強化ではなく、英語で経営の専門科目（コンテンツ科目）を学ぶbilingual, content-based education でなければならぬことを、白石さんに念を押しました。英語は経営学を学ぶツールであるという英語の位置づけは、アメリカのビジネス・スクールで学んだ白石さんにとっては受け入れやすい意見でした。そして、英語圏の大学で英語だけで経営学を学ぶより、日本でバイリンガル教育を受けて広い競争力を備えた人材に育つことにメリットがあると言う私の経験にも、直ぐ共感してもらいました。

私の前任校の総長は日本の経営史に造詣の深い神父でして、カナダの大学で経営学部長をしていた方をヘッドハントしてbilingual, content-based education を移植して経営学科の改革を進めたのです。学生定員の3分の1近くを帰国生徒、留学生などで埋めて少数派にならないようにし、多様な背景の学生が交わるようにする。さらに、1年生の夏休みには英語圏の大学に必ず短期留学し、3年か4年次には1年間交換留学先で専門科目の単位を取得してくるカリキュラムを実施していたことを白石さんに紹介しました。

また、バイリンガル教育は手間がかかり、教員だけでなく教務部、学生部などの協力が欠かせないことを覚悟してもらいました。さらに、授業の形態としては、1つの授業を講義と討論の2つのクラスから構成し、講義だけでは完結しないイギリス連邦の大学で行われている授業形態を取り入れるよう要望しました。このように新しいカリキュラムのために学内外を説得するのは白石さんの役割、私の役目はやってもらいたいことを白石さんに伝えることでして、厄介なことは全部白石さん任せでした。

こうして、産関の改革については結構はっきりした案が出来上がりました。たまたま全学的な改革プランが動き出す時期に重なり、産関単独で学科レベルの改革を先行するのではなく全学の改革

に歩調を合わせることに、さらに、経済学部の経営学科を包摂する学部レベルの改革に広げることという、大学執行部の意向を受け入れることになりました。それで産関改組は1年か2年遅れましたが、2学科体制の新学部ができることになりました。産関を国際経営学科にするとして、もう一つの新経営学科の柱を何にするかという議論がスタートしました。

講義と議論を組み合わせて一つの講義科目とする授業形態を、私は香港大学に居た時に体験しました。後に、イギリスの教員が、討論を通して課題を解決することでソリューション力を高める教育方法に発展させ、「active learning」とか「action learning」と呼んでいました。それを新経営学科の特徴にできそうだと、白石さんに伝えたことがあります。新経営学科のカリキュラムの特徴については、それに関わった先生が今日私の後で話されます。

国際経営学科の英語名称を決めるにあたり、「International Businessではどうだ?」と白石さんから問いかけられました。今からスタートする国際経営学科の英語名称がInternationalではちょっと寂しい、Global Businessでしょうとお伝えしました。白石さんは納得しなかったようで、英語のネイティブスピーカーに「Global Business」というのはどうだと意見を求めています。その英語教員は国際経営学会員ではありませんでしたから、「Global Business」という表現をあまり聞いたことがないと答えていました。しばらく経って英語の公式名称が「Global Business」になったことを知りました。今日「Global Business」という表現は当たり前のように耳にしますが、当時、日本のほとんどの大学では「International Business」と言っていたのです。

教員候補の人選で、私が選考委員会に入ることはあまり有りませんでした。ただ候補者が上がるたびに、白石さんからどういう人物か聞いておりました。「すごくいい候補ですよ。買いです。ぜひともヘッドハントしてください」と答えた候補者がおりました。一方、ちょっと待ってと思いついて『模擬授業をやってもらい、学生の評価を聞いてみましょう。模擬授業後の開設準備室長による懇談の場に私も同席させてください。』などと言って、候補者に会う機会をつくってもらったことも

あります。白石さんは候補者に「経営学部の求人に応募してください」と話を持ちかけながら、不採用と伝えなければならないこともありました。いやな役回りを『いいです、いいです。私が断りますから』と言って引き受けてくれました。自分の持ってきた案件を断った後は気分転換が必要で、お酒の量が増えたにちがいません。

経営学を学ぶツールとして英語教育を担う教員を見出すのは、新学部にとって大変重要な人事になります。先ほど登壇された鳥飼先生に100%頼っておりました。英語プログラムの主任候補者を紹介していただき、松本先生に白羽の矢が立ちました。白石さんは1回目の面談で移籍依頼を軽く一蹴されて帰ってきました。1回目のプロポーズを断られてもびっくりしないと覚悟していましたので、ショックを受けなかったようです。2回目で説得してくると勇んで行きました。ところが2回目もあっさり断られ、かなりへこんで帰ってきました。

立大への移籍でメリットが有るとしたら、家から大学までの距離が近くなることくらいです。それも、車で通うには近すぎて運転を楽しむことができなくなりそうですから、デメリットかもしれません。セントポールズ会館で面談したというので、『大学の前のリビエラとか、駅の近くのホテルとか、もう少し立派なところでお会いして、大学の予算が潤沢であるような印象を持ってもらってはどうですか』などと、私は気楽な意見を白石さんに伝えていました。3度目の面談の場所がどこだったのか聞きませんでしたが、移籍を承諾してもらったと白石さんが大喜びして私の研究室に飛び込んできました。「スゴイ! よくやりましたね。赴任されたら学内の教員に刺激を与えてもらいましょう。多様な人材の組み合わせで学部を革新していきましょう。」と言いながら、いつもの寿司屋の2階へ出かけて白石さんの労をねぎらいました。白石さんのたばこの煙さえ我慢できれば、大体のことはやりとげてもらえたのです。

iii. 初代経営学部長

経営学部の発足を記念して、祝賀会がライフスナイダー館で開かれました。他学部の学部長から祝辞をいただきました。この時ばかりは白石さんが感極まって涙にむせびました。学部長仲間から

「鬼の目にも涙か」とか冷やかされていましたが、苦労を重ねてやっとたどり着いた長い道のりを思い起こして、涙があふれ出たようです。

白石さんの2回目の涙は、定年退職の時、学部主催の感謝会でした。私は既に立大を退職していましたが会に呼んでいただき、学部創設時の思い出をお話ししました。白石さんに弘子さんはご一緒じゃないのですかと尋ねましたら、大学の近くで待ってもらっているとのことでした。多分、弘子さんに涙を流すところを見られなくなかったのでしょう。

白石さんは立大で定年を迎えた教員が学部や大学院に居残ることには反対でした。たまたま私が定年になる年に、学部裁量の予算が付き期限付きの教員を雇うことができるようになりました。白石さんは私に定年後どうしたいかと訊いてきました。学部に残してくださいと私からお願いすれば検討します、と言うのです。私は、学部が残ってくださいと言うのなら残ります、と生意気な答えをしました。お互い意地の張り合いで、私の再雇用の話は足踏みしたままになりました。当然ながら私が折れて、白石さんに残してくださいと申し入れました。その年度に学部裁量予算で特任教授に任用されたのは全学で私だけでしたので、全学教授会での学部裁量予算の用途説明に白石さんは苦勞されたことでしょう。お前のために大変だったんだぞと言いたかったのかもしれませんが、そのようなことは一切口にしませんでした。白石さんの度量の大きさを見たような気がしました。

経営学部の特任教授の研究室はタッカーの5階で、エレベーターはありませんでした。隣の棟のエレベーターで途中の階まで行き、渡り廊下を通った先は階段です。年をとって階段を上がれないようなら退職してくださいという仕掛けになっていました。隣の研究室は田谷先生でした。産関一期生として西山ゼミで経済学を学び、カリフォルニア大学で学位をとられた方です。IMF本部で勤務の後帰国され、経営学部の教育に快く参加していただくことになりました。田谷先生は経営学部での任期満了を迎えるにあたり、ゼミの指導だけは続けたいと望んでおられました。田谷ゼミに入った学生がよく勉強するように変わっていくことを私は見ておりましたので、雇用の継続案件は白石さんに直接お願いするようにと助言しまし

た。講義を担当せずゼミだけ指導するという契約の先例はなかったのですが、首尾よく再任用されることになりました。

iv. 学院理事長時代

最後に白石さんにお会いした時は学院理事長になっておられました。産関OBが大相撲の升席を取ったというので、白石先生ご夫妻にご一緒してもらうことにしました。1年ほど前、2019年9月場所でした。相撲を観て飲みながらなので、苦勞話は避けて良いことだけを話題にし、午後から夕食をはさんで二次会まで、楽しい時間を過ごしました。

白石さんが立教を強く愛していたことは誰もが知っています。立教関係者なら誰でもが自分と同じくらい強く立教を愛して欲しいと思っていました。校歌を歌うのに歌詞を見ていると、まだ歌詞を覚えていないのかと叱られますが、それも立教愛の現れでしょう。学院への寄付も立教愛の指標の一つです。職員が学院に良く寄付していることを嬉しそうに話していました。寄付者リストを元に一人一人に感謝の念を伝えていたようです。私は退職時に経営学部を指定して寄付したことがあります。学部レベルの成績優秀生表彰制度をつくって記念品代に充てたと白石さんから以前報告を受けたことがあります。そのことを未だ覚えていて、私の Give back 行為に国技館で改めて感謝されたので、恐縮しました。細かい気づかいをする人でもありました。

大学院経営学研究科で新しい領域の専攻を開発することは石川淳先生から伺っておりました。新専攻は産関の柱の一つであった組織心理、組織行動などを大学院の柱として発展させたことになるという私なりの解釈を、大相撲後の二次会でお伝えしました。白石さんは大変喜ばれて、酒の回りがいっそう早くなったようでした。『社会の求める優れた人財を全学で育てる。立教全体を良くすることにもっともっと力を入れて行く』とこれからの目標を白石さんは熱く語っていました。

国技館から池袋まで車でご一緒させていただき、駅でお別れしました。それが最後になりました。まだまだお元気で活躍していただきかったです。

今日は与えられた10分を大幅に超えてしまい、

大変失礼しました。長時間ありがとうございました。(拍手)

6. 日向野幹也教授

山口 ありがとうございます。続きまして、経営学部のもう一つのコアプログラムであるリーダーシップコースについての話を、その開設時の主査であった日向野先生からビデオメッセージということで寄せていただきましたので、こちらのほうをご覧くださいだければと思います。

日向野 日向野です。出張なので、こんな形で失礼します。私が白石さんに最初にお会いしたのは2004年、経営学部の開設の2年前でした。そして、経営学部開設準備委員会が金融論の教員を募集していることを教えていただきました。白石さんからは、なぜ新しい経営学部でリーダーシップ教育を開始しようとしているのか、どんな枠組みをお考えか、お話を伺いました。会場は学部長室が多かったのですが、当時は、立教通りから地下に入った、刺身のおいしいみつ石でも、よくお話を伺いました。

そこで伺ったのは、経営学科の特色の1つにリーダーシップ教育を据えたいということ。それから、これからの社会の動きを予測すると、経営学科のコアというのはリーダーシップ関係しかないという白石さんご自身が判断なさったことです。その結果として私は金融論の教員として採用されたのですが、その採用面接の席上で、あれはたぶん佐々木さんだったと記憶していますが、リーダーシップ教育にも注力するという約束をいたしました。佐々木さんがキューを出し、私がそれに「分かりました」とお答えしたように記憶しています。

翌2005年度は、白石さんの社会学部長兼経営学部開設準備室長最後の1年でした。白石さんが獲得なさった文科省の現代GPの資金がありましたので、お願いして、学部生のリーダーシップ教育の現状を調査するためにアメリカに出張に行かせていただきました。そうしたところ、現地では権限によらないリーダーシップというのが大学の学部生レベルの教育にも予想以上に浸透していることが分かり、驚き、帰国してから、経営学部のBLP (Business Leadership Program) もその方向に転換したいということを報告しました。白石

さんをご快諾くださいました。いま思えば、それはすごく大きな決断だと思います。

それで、私にとっては3年目の2006年度、経営学部スタートのときには、皆さまよくご存じですが、立教初の学部まるごとウェルカムキャンプをやりました。白石さんご自身が新入生全員と握手したり、4月からほぼ毎日、リーダーシップのクラス、当時は「基礎演習」という名前でしたが、そのクラスごとに、15日間かけ、昼休みを新入生と過ごしたりなさっていました。白石さんは「同じサンドイッチは飽きたな」と苦笑なさりつつ、やめる気配はなく、その後も何年間かはこの習慣を続けられたようです。

ウェルカムキャンプだけではなく、さまざまな機会を捉えては、学生にも教職員にも、そして他学部関係者にも、新学部スタートへの熱意を十分な形で示されました。私から見ると、まさにリーダーシップを体現されていたと思います。それは経営学部教職員にもすぐ影響して、率先してリスクを取っていらっしゃる白石さんのリーダーシップに応じて成果を出そうという機運がみなぎったように思います。

ただ、私に関するところはちょっと情けなくて、BLPは、白石学部長時代の最初の2年間は、残念ながら内外からは全く認知されずに、資金的にも困っていました。外部資金がどうしても必要で応募し続けたのですが、落選続きでした。そんな中で白石さんは、外部資金応募のヒアリングには、毎年、私に同行していただきました。さらに2008年の初めに、私は非常識な願いをしました。私が体を壊して入院したものですから、その入院の保証人を白石さんに頼んでしまいました。これは、本当は親か兄弟に頼むものですが、白石さんは快諾してくださいました。

白石学部長3年目の2008年度から、ようやくリーダーシッププログラムが上向きになってきて、文科省の教育GPという外部資金を初めて獲得できました。もちろん最終ヒアリングにも同席していただき、熱弁をふるってくださいました。幸い、それ以降、BLPはだんだん、学外、次に学内でも認知されるようになりました。

2010年度からは統括副総長、学院常任理事に就任されて、2013年からは、私のほうとしては全学カリキュラム版のリーダーシッププログラム、立

教GLPを発足することを提案したのですが、その実現に当たって白石さんは、山口和範教授とともに多大なご支援をくださいました。いま思うと、私が11年間でやったことというのは、白石さんが用意してくださったBLPとGLPという2つの箱があったことがとても大事で、その箱の中身を埋めるだけのことだったように思います。

その後、2015年度からは、リーダーシップ教育を立教だけではなく全国の大学や高校に広げる運動を開始して、これについても白石さんは全面的にご支援くださっていました。今回理事長になられてからも、全国展開については逐一ご報告申し上げては喜んでいただきました。

最後になりますが、白石さんから伺ったことのうちで、一番、衝撃的といいますか、しみたといいますか、印象的だったのは、ウィリアムズ司教の「道を伝えて己を伝えず」という言葉です。私はもちろんクリスチャンではありませんが、すごく印象深く残っています。白石さんご自身は、こんなことをおっしゃっていました。道を伝えようとして己も伝えてしまう癖がご自分であって、ここは刑事コロソボみたいですが、「しょっちゅう女房にしかられるのだよね」と自虐なさりつつ、しかし私から拝見すると、なさっていることは十分に司教の教えに沿っていたと思います。

私自身も白石さんに影響され、同じように内省して、リーダーシップ教育という1つの道を伝えつつ、BLPやGLPというのは私の属人的なプログラムではないということを示すべく、ほかの方にも引き継げるようにすることを、最後の2年ほどは目標にして、微力を尽くしたつもりであります。白石さんがお亡くなりになった後も、立教大学の教職員の皆さまはこの教えを守ってくださいと思っています。白石さんの思い出について私からは以上です。ありがとうございました。(拍手)

7. 石川淳教授

山口 それでは、ここから、設立時のメンバーとして、現在経営学部にも所属している石川、尾崎、佐々木、高岡が白石先生についての話をします。では、石川先生からお願いします。

石川 ただいまご紹介にあずかりました石川です。せんえつではありますが、一言、白石先生に

ついて私が知っていることをお話したいと思います。私はリーダーシップの研究者なものですから、リーダーシップという視点から白石先生のお話をしてみたいと思います。私から見ると、白石先生は典型的な変革型リーダーシップをとられる。変革型リーダーシップというのは、日本だけではなく世界中で最も効果が高いと言われているリーダーシップです。その典型だなと感じています。

変革型リーダーシップには4つの特徴があり、その1つ目が、理想的な影響、まさしくビジョンを提示するということです。これは今まで、鳥飼先生のお話も含めて、皆さんご存じのとおり、「新しい経営学部をつくるのだ。立教大学らしい経営学部をつくるのだ。アジアで際立つアジアでナンバーワンの経営学部をつくるのだ。リーダーシップ教育とグローバル教育を前面に押し出すのだ」ということを明確にお伝えいただいて、私どもはそれに感銘して、経営学部を設立するために頑張ろうと動いてきた。そのように感じています。

また、それだけではなく、周りの人のモチベーションも鼓舞する、高めるような方でして、私から見たところですが、実は、私はたまたま、白石先生の芝高校の後輩でもあるのです。たまたま芝中高の話をしているのですが、その話が終わると、「でもやはり、芝よりも立教のほうが好きだよな」と、芝の後輩を目の前にして立教愛を語られるのですね。そういうお話を伺うと、やはり、「立教に来てよかったな。立教のために頑張りたいな」という気持ちになります。

それから、先ほど日向野先生からの話もあったとおり、リーダーシップ教育を始めるというときに、実は、恐ろしいことに、リーダーシップの研究者が誰もいなかったのですね。それで始めるのもすごいと思います。「石川君、人材マネジメントだよな。同じようなものだから、リーダーシップの研究者になってくれる？」という感じで、これは、こういう場だからすごくマイルドに申し上げていますが、ちょっとお酒が入ると、「おい、石川、リーダーシップの研究者になれよ」という感じだったのですね。

研究者の方がいらっしゃるからお分かりいただけると思いますが、自分の専門を変えるというのはかなり大きな決断です。でも、そういうふうには白石先生に言われると、後輩だから言うことを聞

くというのも2割ぐらいいはあったのですが、8割ぐらいいは、「白石先生に言われたならやりたいな」というふうにもちベーションを高めた思い出があります。

それから、白石先生は、事あるごとに「みんなが誇れる学部を創りたい」と仰っていました。

私がいた当時の産関というのは、社会学部の中で一番勢いがいいというか偏差値が低い学科で、経済学部の経営学科もそれほど偏差値が高くない。それで学生自身も結構いい思い出をしている場面があった。自分たちの目の前の学生がそういうことでいい思い出をするのではなく、自分の学部が誇れるような、そういう学部をつくりたいのだとおっしゃっていて、それもわれわれのモチベーションをすごくかき立ててくださいました。

一方で、新しい刺激をくださる方でもあったと思います。今でこそ、リーダーシップ教育やグローバル教育は、どこの大学もやっていますが、当時、本格的にこれをコアに据えてやろうという学部は、たぶんなかったと思います。そういうことにきちんと目をつけられた。それから、学部長になられて、もちろん2年目ぐらいいまでは本当に一生懸命で、もちろん最後まで一生懸命でしたが、後半は、経営学部のことよりもむしろ立教大学のことを盛んにおっしゃり、「立教が心配なのだ。こうなりたいのだ」とおっしゃったのです。その後、統括副総長という立教のトップのほうになられたのですが、そうすると今度は、「日本の教育界はこれでは心配だ」とか「日本の教育をこのようにしたほうがいい」と仰る。つまり、その立場よりも常に一歩先をお話しくくださるのです。そういうことが私にとってはすごく刺激的でした。

また、私が「こういう問題があるのですよ」と言うと、それに対し、「このような見方もある」「あのような見方もある」と、いろいろな見方を提示してくださる。そういう方でもありました。

一方で、先ほどからいろいろ話が出てきましたが、個への配慮というのもすごくできる方でした。私は文句が出やすい性格なものですから、よく白石先生にすぐ文句を言いに行くのです。そうすると、皆さん思い出があると思いますが、満面の笑みで、「俺は石川のことを大事に思っているのだから」と言ってくださいます(笑)。もちろん、心の底で、「誰にでも同じようなことを言

っているのではないかな」なんて思ったりしますが、白石先生がそういうふうに言ってくださると気持ちが落ち着く。そういう方だったような気がします。

これは私がサバティカルでアメリカの大学に1年間行く出発前のときにおっしゃってくださったのですが、「俺もトップジャーナルに載せたことがある。でも、今はなかなかそういうことができなくて、マネジメントで頑張る。だから、あなたみたいな若手は、世界のジャーナルとか学会とかそういうところで闘えるように頑張ってくれ」。

私はそれまで国内のジャーナルにしか投稿したことがないような人間だったのですが、そういうふうに言っていただけて、せっかくアメリカに行くチャンスもいただけたので、そこから、少しずつ海外での研究発表ということを考え始めました。

それと、いろいろ困りごとがあると、私は学部長の経験もありますが、やはり最後は白石先生を頼ってしまうのです。そうすると、やはり、「分かった。任せとけ」とおっしゃってくださるのです。そのうち半分ぐらいいは忘れられてしまっていますが、やはり白石先生にそういうふうに言っていただけると安心する。最後に白石さんがいるというのは、本当に、学部長のときも力になったし、立教の教員としても力になっていました。私の中で。

私がリーダーシップの研究を始めてしばらくすると、何度か、白石先生から「石川君、僕のリーダーシップどう？」と聞かれました。本当にそのときから変革型リーダーシップだと思っていたので、「典型的な変革型リーダーシップだと思います」と申し上げると、照れたような感じで「まあね」とおっしゃるのです(笑)。その笑顔がもう見られないのは、本当に悲しいし、つらいです。でも、残された者として白石先生の遺志を継いで、経営学部のために、立教大学のために、みんなと一緒に尽力していきたいと思っています。どうもありがとうございました。(拍手)

8. 佐々木宏教授

山口 続きまして、佐々木先生、お願いします。

佐々木 こんにちは。ただいまご紹介にあずかり

ました佐々木と申します。今日は貴重な機会をいただき本当にありがとうございます。

皆さま方がおっしゃっているように、白石先生のことを思い出すと「笑顔」。この二文字です。白石先生がお亡くなりになって、発表になる前に学部長から個人的にメールをいただきました。私が即座にお答えしたメールがこれです。

「立教のために一身を捧げてこられた。思い出すのは白石先生のにこやかな顔ばかりです」

私の思いは、この2文で尽くされています。今もその気持ちは変わりません。

この会に向けて白石先生のお写真がないかと探したところ、パソコンの中にこういうもの(図1)がありました。白石先生は、GPAの高い学部生を表彰する制度をつくられまして、これが第1期生の成績優秀者表彰の際の写真です。先生は、このとき本当にうれしそうな笑顔をなさっておられました。そのことを今でも覚えています。

白石先生の「笑顔」で、思い出されるシーンは

いくつもあります。まず、私が立教に赴任してきたのが2003年で、社会学部・産業関係学科に所属しました。その初日、4月1日に「佐々木さん、ちょっとちょっと」と先生に呼び止められて、学部長室に入っていました(当時白石先生は社会学部長)。開口一番、「これから立教大学で経営学部をつくる。協力してよね」とおっしゃってニコッとされました。それがものすごく楽しそうで、また決意に満ちた笑顔だったのです。私はそのとき、「これはいい学部ができる」と確信しました。

確かに、よくよく考えてみると、多くの競合校には商学部や経営学部があります。商学部がないのは「しょうがない」というおなじギャグで何とか逃げられますが、経営学部がないというのは、やはり肩身が狭いというか・・・私の専門も経営学なので、立教にいよいよ経営学部ができるというので、とてもうれしく感じた記憶があります。

10カ月ほどたって、また「佐々木さん、ちょっとちょっと学部長室へ」というので、その時は石川先生がおっしゃった満面の笑顔だったのです。何だろうなと思ったら、びっくりしました。



図1 成績優秀者の表彰制度

「翌年、君は学科長だ」とおっしゃるわけです。「えっ。私はまだ10カ月しかたっていないです」「俺がいるから大丈夫だ」とおっしゃるので、「はい」と言って、2年目から学科長で、右も左も分からない状態で白石先生に手取り足取りご指導いただいた記憶があります。

同じようなシーンでは、いまキャリアセンターの責任者を拝命しているのですが、それになる直前のときに、白石先生から再び「ちょっとちょっと」とニコッとされて、「あなたに、これから少し大きな仕事に就いてもらう」とおっしゃった。大きな仕事というのは、キャリアセンターの責任者ということでした。要するに、「本学は良い就職実績があるのに、キャリアに関する認知度が高くない。これは一体どうしたことか」ということで、「認知度アップをしてブランド力を向上させたい」という先生のお考えがありました。

それを具体化していくため、2016年にキャリア広報のためのワーキンググループができました。広報課、教学改革課、企画課、入学センター、キャリアセンターなどの管理職と勢いのある中堅

スタッフでチームを構成し、ワイワイガヤガヤと様々な施策を検討し、その結果を白石先生に報告しました。そこでの検討を通じて、「キャリアの立教」という言葉が生まれ、これをキャッチフレーズに使用して認知度を高めていくことになりました。その後、広報の長野さんたちがいろいろな媒体で熱心に発信してくださり、今ではだいぶ認知されてきたように思います。

この写真(図2)は鈴懸の径ですが、不思議なことに、月曜日の朝に時々白石先生とすれ違います。私は12号館のほうから出てきて、白石先生は4丁目のほうから歩いていらっしゃる。ちょうど8号館の前ぐらいですれ違い、「先生、おはようございます」と言うと、「よう、最近どう?」とか言って、手を大きく挙げてニコッと応えてくださる。たったそれだけですが、なんだかそれだけでうれしくなって、その一日がハッピーになる。2~3カ月に1回くらいでしたでしょうか、そんなことが何度もありました。

最後になりますが、白石先生に「いつもの笑顔で私たちをどうぞ引き続きお見守りください」と



図2 鈴懸の道

申し上げて、終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

9. 高岡美佳教授

山口 続きまして、高岡先生。

高岡 学部創設時のカリキュラムの作成に関わらせていただきました。そのとき白石先生から得た学びについて話をさせていただきたいと思います。

私にとって白石先生は、高潔さと実行力を兼ね備えたリーダーでした。私はリーダーシップの専門家ではないので、リーダーシップのことはあまりよく分かっていません。しかし、私自身がついていきたいなとか、できることは何でもやりたいなと思えるようなリーダーというのは、自分のことよりも全体のことを優先してくれる人です。自分の利益を優先する人は、表面上もっともらしい理由をつけても分かりますし、あまり協力したくないなと、ついていきたくないなと思うものです。でも白石先生は、一度もそういう姿を見せたことがなく、そのように考えられているシーンを見たことがありませんでした。

例えば、学部のカリキュラムをつくる時、私も2004～2005年、つまり、設置準備委員会、そして開設準備室とお手伝いをさせていただき、当時一番若手だったということでカリキュラムの作成に携わっていたわけですが、そのときにこんなことが起きました。まず大前提として、社会学部と経済学部から来た先生たちのご研究の専門分野というものがあります。一方で、経営学部としては、国際性を兼ね備えたリーダーシップを育てるということで、コンセプトはもう決まっている。そのコンセプトに沿ったカリキュラム体系をつくる必要があるわけです。その際に、大先輩の先生方のもとの専門領域やご担当科目があるので、カリキュラムをつくる立場としては、「あの先生の科目がカリキュラムに入らないと怒られるのではないか」と考えてしまいます。

あるいは、悪気がある先生は一人もいないのですが、皆さん自分の専門領域こそは社会に役立つと思って研究しているわけですから、新学部のコンセプトから若干離れているものの「こういうプログラムを入れたほうがいいのかではないか」とか「この科目は必要ではないか」というようなこと

を言います。私は当時、若手だったものですから、立場的にどうすればいいかわからないことがありました。

そんなとき白石先生が、「高岡くん、いいんだよ、そんなの。ちゃんと理想を追求しなさい。何か起きたら僕が何とかするから。ちなみに、僕はいいよ。僕の持つ科目がなくても、基礎演習でも何でもやるから」と言ってくださったのが、とても印象に残っています。正直に言って、すごく助かりました。ちなみに、もう一名同じことをおっしゃってくれたのが、いま隣にいる山口学部長です。「僕は統計学が専門で、たぶん、経営学部に行ったら教えることができる専門科目は少なうだから、基礎演習をやるよ」と言ってくださった。

こう言う簡単なことのように感じるかもしれませんが、この世界で自分の担当している専門科目が新カリキュラムでなくなるのに抵抗しない先生なんて、とても少ないと思います。「白石先生は、ご自分のことではなく全体のことをきちんと考えてくださるリーダーだな。ついていこう。役に立てるように頑張ろう」と、それが出会って間もない頃の印象です。

もう一つ、すごく印象に残っていることがあります。今となっては、経営学部は割と社会でのプレゼンスも高く、「新しい学部なのに、うまく成功したね」と言ってくださる方も多いと思いますが、当時はまだ、経営系の学部をつくるということ、350名の定員ということ、そして学生数から割り出した22名の教員でスタートすること、それしか決まっていなかった。「経営学部」という名称さえも当初は決まっていなかった。それだけの少ない教員数でスタートしなくてはならないということで、カリキュラムをつくる立場としては、最初は、早稲田大学や学習院大学など想定ライバル校のカリキュラムを集めて研究を重ねました。しかし、いくら研究を重ねても、22名の教員数で他大学の経営学部・商学部と同じようにファイナンス、マーケティング、マネジメントと経営学の基本と呼ばれる分野の科目を配置しようとする、教員数が足りません。さらに、リーダーシッププログラムを入れて、英語で教える科目を入れるとクラスサイズも小さくしなくてはならず、22名では、とてもではないけれど足りない。

そこでどうすればいいか、また困ってしまった

ときに、白石先生がおっしゃったのが、「知恵と工夫だよ、高岡くん。やることが、理想が決まったら、それに向けて、どうやって実現するかが重要。もっと知恵と工夫を凝らして」ということでした。新学部には、偏差値対策もあって2つの学科を設置しましたが、「両学科の壁をすごく薄くして、希望する学生には他学科の科目も積極的に履修してもらえば、教員数の少ないことはカバーできるし、強みも発揮できるのではないか」という白石先生のお考えで展開科目数も抑えることができました。ビジョンを掲げ、理想を追求しつつ、それを実現するためにどのような仕組みを作り体制を組めばいいか、知恵を使って成し遂げるといふ実行力を、白石先生はお持ちでした。

Business Leadership Program (BLP) が経営学科のプログラムで、Bilingual Business Leader Program (BBL) が国際経営学科のプログラム。今ではそのように世間に広まっていますが、当初のコンセプトは、BLP は両学科共通のプログラムで、経営学部全体のプログラムであり、国際経営学科の学生のみそれに重ねてBBLを受講するというものでした。なぜなら、22名の教員で、各学科に独自のプログラムをつくって、2つにきちんと分けてしまうと、時が経つにつれて、双方の教員が少ない人数でプログラムを回すことになり疲弊し、自分のプログラムに予算と人員を割いてほしいと言うことがわかっていたからです。そのようなことが将来的にも起きないように、教員間においても学科の壁はなるべく低く、セクショナリズムが起きないようにと白石先生がおっしゃっていた。今でもそれはよく覚えていますし、その思いで、22名でスタートして、ずっと手を取り合って頑張ってきたのが、今の成果につながっているのではないかと思います。

もう一つだけ皆さんにお話しておきたいことは、白石先生は、常に、「新規の教員を採用する際は自分ができないことをできる人を採用するようにしてください。その場にとどまっているのは停滞していることだから。私たちは一歩ずつ前に進んでいくことで、競争に勝ち続けることができる。変化に対応できるというのはそういうこと」とおっしゃっていたことです。例えば、恥ずかしながら、私は英語があまり得意ではなく英語で授業ができません。人間は、本能的に自分が低く評価さ

れる仕組みを入れることに抵抗がありますし、したがって、自分ができないことをできる教員、自分を超える能力をもつ教員を採用したくないというインセンティブが働く人もいます。

しかし、自分より優れた人を常に採用し続けないと、結局、世間の流れの中では負けていってしまう。「だから、それはやっては駄目だよ。僕は学部をいつか離れるけれども、絶対そこは忘れないでね」と言われたことが印象に残っています。その教えを守り、経営学部の人事というのはいつも、私だけでなく他の先生方も、自分よりも研究面や教育面で優れた人材を採用しようと動いていますし、その結果、良い人が集まってくれて、今につながっていると考えています。

白石先生が2005年に開設準備室の室長になられた年齢を計算すると、今から15年前なので、52歳です。私も今ちょうど52歳です。同じ年齢になってみて、白石先生から教えていただいたことを一つひとつ思い起こすと、「自分が同じようなことを、いま、本当にできているのかな」と考えてしまいます。白石先生のように、高い理想を掲げ、それを実現するために全力で頑張っているのか、業務の多さに疲れてしまい「もういいや」と思ったりする瞬間はないのか、何より、学生の成長をサポートするために毎日ベストを尽くしているのかと考えると、同じ年齢に達したものの、白石先生と同じようにできていないのではないかと反省しています。

経営学部を立ち上げてくださったときの白石先生の思いに少しでも応えるために、今後も精進していきたいと思っています。また、経営学部として、しっかりと社会に貢献し、満足のいくキャリアと人生を手に入れて自分と周囲の人を幸せにすることができると若者を育てていきたいと思っています。ありがとうございました。(拍手)

10. 尾崎俊哉教授

山口 ありがとうございます。では、尾崎先生から。

尾崎 ありがとうございます。経営学部の尾崎です。私も、白石先生に初めてお目にかかったことから、簡単に話したいと思っています。それは2004年の秋でした。私はそのころ、IBMで20年

間ちかく働いていたのですが、少し前から存じ上げていた林偉史先生に自分のこれからのキャリアのことを相談しているうちに、「紹介したい人がいる、ご飯を食べに行きましょう」と言われて、お目にかかったのが最初です。そのときは経営学部開設の構想を私にお話しいただいたのですが、最初の印象はよくなかったです（笑）。すごい大風呂敷だな、というのが白石先生の第一印象です。しかしとんとん拍子で、「仕事を一緒にしませんか」とおっしゃっていただいて、面接を受けて、2005年4月に経営学部の開設準備室に入らせていただきました。

最初に白石先生から言われたことでよく覚えているのは、「言ったらやってよ」。私は結構いろいろなことを気がついたり思いついたりすると、すぐに口にしてしまう悪い癖があります（笑）。そこで、「言ったらそれをやって」というわけです。かなりいろいろなことを言ったのは覚えています。例えば、ウェルカムキャンプをやるうとか、経営者に応援団になってもらう諮問委員会を作ろうとか、修士課程と一体的な5年一貫プログラムをやるうとか、口走っていたと思います。すると、「じゃあやってよ」とおっしゃるわけです。

その中で1つ、すごく覚えていることがあります。白石先生は、経営学部の競争優位の柱として、リーダーシップ教育とともにグローバル教育を掲げておられました。それであるとき、「どうやって実現するのですか」と言ったら、業者に留学プログラムをアウトソースするとおっしゃる。

そこで生意気にも、「競争優位の源泉は、自分たちでつくりあげるものです。業者に任せられるのなら、どこの大学でもできてしまいます」と言いました。そうしたら、またいつものように、「じゃあやってよ」と言うわけです（笑）。それで、留学プログラムを経営学部の中に独自につくることになりました。やり始めてすぐに、大学のなかにすでに立派な留学プログラムがあったのですが、実は当時、あまり活発ではなかった。そこで学部のニーズにぴったりあう別の留学制度を作ろうとしたら、やはり様々なところで軋轢が起こる。

そのときに、白石先生はすごいな、と思ったことがあります。それは、「ガンガン進めて、あとのことはこっちでフォローするから」という、肝の座ったリーダーシップのとりかたです。これが

いかに、言うは易く行うは難しかは、皆さんご存じの通りです。これだけの伝統のある、がっちり出来上がった学校で、今までと違うことをやろうと思ったら、それなりに抵抗されるところがいっぱい出てくる。私はそれが最初のうちはかなりストレスだったのですが、白石先生は、ニコニコというか、不満を一言もおっしゃらずに、あちこちで私がたぶん波風を立てているところに行かれて、その後始末をしていらっしゃるんですね。あれは本当にびっくりしました。

白石先生とは最初の5年間、めちゃくちゃ酒を飲み、文句とか悩みをいつも聞いてもらっていました。そのなかのあるとき、「白石先生にもご迷惑をおかけしているみたいだから、やめましょうか」と言ったことがあります。そうしたら、「もっと、どんどんやってよ」と言う。その裏ではずっとご苦労されていたのは、本当に後から分かった話です。

もう一つ、白石先生で覚えているのは、「てやんでい」です。酒を飲めば飲むほど、べらんめえになられる。あるとき僕が白石さんに、「リーダーシップとグローバル化というのは、中身はよくわからないけれども、構想はすごいよね」と言ったら、「てやんでい、尾崎」とか言って、はなし始められたことがあります。

この話は、自分の胸のなかにしまっておこうかとも思ったのですが、やはり白石先生を語るうえでは重要なことと思いますので、紹介させていただきます。それは、「立教がじりじりと沈んでいくのが耐えられない」という話です。

びっくりして、なんのことですかと何うと、「尾崎、お前は上智卒だが、上智のような、てやんでえなばつとしない学校に、うちがいつの間にか偏差値で抜かれたのが許せない、てやんでえ」というわけです。これは相当にべろべろになったところで伺った話です。だから、半分ぐらい本当ではない可能性もあります。しかしあとの半分は、普段、心のどこかにしまっておられたことを「てやんでえ」のなかにまぶして吐露されたのではないかと思っています。「絶対に巻き返してやりたい」とも言っておられました。

僕が上智にいたとき、ヨゼフ・ピタウという、たいへん優秀でリーダーシップにも溢れた学長がおられました。彼のもとで、上智は新しい時代を

迎えます。そのことを思い出し、「それじゃあピタウ先生から話を伺ったらどうでしょう」と提案しました。そのころ経営学部をつくるための開設準備室で、月1回、企業の経営者など外部の方をお招きして勉強会をやっていました。そのなかで、ピタウ先生にも来て頂くことになったのです。さすがに普通の内輪の勉強会だけでは終わらず、当時の押見輝男総長も参加されることになりました。

でも、勉強会の中身よりも重要な話がありました。勉強会を始める前に、12号館2階の学部長室で、ピタウ先生に会っていただいたのですが、単なる挨拶ぐらいに考えていたら、ピタウ先生は白石先生をじっと見て開口一番、「なぜ立教大学が、今、経営学部をつくるのですか」とお聞きになる。そうしたら白石先生は「うっ」となっていました。本当に「うっ」です。私も「うっ」となりました。

我々は、リーダーシップ教育やグローバル教育など、経営学部でどんな教育をやるか、どういう風にやるか、についてはよく議論していました。しかし、なぜそれが立教でなければならないのか、については、きちんと向き合っていませんでした。結局、我々はその質問に満足に答えられないまま時間が来て、12号館地下の会議室に向かいました。勉強会の中でも、ピタウ先生はもう一回、同じ質問を、参加者に問いかけました。

それで勉強会が終わったあと、「反省会」と称

して飲みに行きました。そしたら「参った」と。「あの質問は本質だなあ」と仰いました。しばらくして、西原先生のところに勉強に行ってくる、と言うのですね。それで今日の最初の話に戻ります。私は当時、西原先生のことを存じ上げませんでしたが、なぜ立教大学のなかに経営学部が開設されるのか、それを自分の言葉で学生に伝えたい、なぜならば、経営学部は、立教の建学の精神の上に建てられているのだ、ということを知ってほしい、でも自分よりも上手に伝えられるのは西原先生だから、学部として初めて実施するウェルカムにお呼びしたいというわけです。

白石先生はこの話をずっと覚えておられて、何回も、「あのピタウ神父の話はすごかったよ」と思いだしておられました。経営学的に言うと、あの質問は組織のミッション（使命）、存在理由を問う質問だったと思います。戦略が優れていると言えるのは、ミッションが実現できるからです。白石先生にたくさんご迷惑をおかけしたのだと思いますが、あのタイミングでピタウ神父に会っていただけたのは良かったと思っています。

最後に、2018年2月22日に池袋の飲み屋で、白石先生の定年退職のお祝いをやったときの話をさせていただいて、終わろうと思います。非常にうれしそうな顔をしていらっしやっただのが、強く印象に残っています。一言、忘れられない言葉があります。満足そうに、「もう言うことないよ」



(2018年2月22日の退職祝い)

です。立教学院の理事長に就任されるのは、その年の夏のことですが、皆、まだまだこれから立教のために活躍されると思っていました。ですから、「いやいや、これからまだまだご活躍でしょう」と申し上げました。

そうしたら、「いやいや経営学部について、もう自分は言うことないよ」です。そこから感じたのは2つあります。1つは、「自分として、経営学部をいい学部にするために必要なことはやった。そこから先はおまえらがやれ」です。もう1つは、「自分の関心は経営学部だけでなく、立教全体だ、もっともっと伸びてほしい」です。

この2つの思いを白石先生から託されたと思っています。どうもありがとうございます。(拍手)

11. 柴良治氏

山口 ありがとうございます。それでは、今度は立場を変え、たぶん尾崎さんが一番迷惑をかけた柴さんに登場していただきたいと思います(笑)。よろしくお願いします。柴さんは、先ほどあったウェルカムキャンプのときに、実は、向こうが何もやってくれないので、全て立教でやらないといけなくて、鍵も含めて柴さんが全部学生に配っていた。それが一番印象に残っています。

柴 柴です。こんにちは。実は、大学にいたらこの3月で定年になっていたはずですが、いまだに子会社にいるものですから、キャンパスの中をふらふらしています。先生たちともよくお目にかかるのですが、まさかこの年まで働いていると思わなかったです。先週だったか、立教通りを歩いたら、山口先生に声をかけられ、「実はこういう会があるのだけれど、白石先生がどういう思いで経営学部をつくったか、当時事務4課を統括されておられた柴さんから話してほしい」と言われました。

よく考えてみると、こういう経営学部をつくりたいのだと白石先生と熱く語り合ったことはないのです。そこで何を話そうかと思い、自分が経営学部の事務で関わったことを整理して、その中で何かお話しできればと思い、まとめてきました。聞いてください。

経営学部の開設に向けてということですが、2004年10月に、経営学部の設置準備室というところ

で白石先生とご一緒に、仕事が始まりました。実は、僕が職員になった動機は、自分が学生時代にクラブで学生部の人たちにお世話になったということがあって、自分も頑張っている後輩の世話をしたいということでした。ちょうどこのとき、30半ばから50手前まで学生部に13年間いて、実は一通りやり終わった後で、ちょっとポーンとしていた時期ですが、まさかこの後、職員生活の中で一番忙しい時期が来ると思っていませんでした。

2004年10月に経営学部の設置準備室ができました。そのとき同時に、アカデミックプランというのを覚えている方もいらっしゃると思いますが、2006年4月に向けて学部・研究科の大改編みたいなものを大学で用意していました。それを扱うので、同時に、池袋キャンパス将来計画推進室というところができました。それと、新座のほうで、現代心理ができるので現代心理学部の設置準備室と、新座キャンパス将来計画推進室というのができ、スタートしました。

2005年4月に文科省に設置申請をするのですが、当時、大学を広くつくるという文科省の方針があって、届出と認可に分かれていて、届出で認められるとわりと簡単に仕事ができる、認可になると莫大な書類をつくってやらなくてはいけないということだったのですが、経営学部は届出でいいということになって、2005年4月に無事に届出が終わりました。その後、名前が「開設準備室」に変わるのですが、2006年4月の開校に向けて、この1年間は、いろいろ実際のカリキュラムを詰めていった時期です。

それで、当時の学内状況と書いたのですが、先ほどお話しした「アカデミックプラン」と称した学部・研究科の改編計画ということですが、この当時、大学はどんな状況だったかということ、1959年(昭和34年)に実は法学部ができていますね。その前年に社会学部ができています。それから40年間、観光学部とコミュニティ福祉学部ができるまで、新しいものは何もできていません。僕の学生時代もこの真ん中に入ります。

その後、2006年に経営学部ができて、同時に現代心理学部ができ、2008年に異文化コミュニケーション学部ができるのですが、ここまで10年で5学部増え、40年間5学部体制だったのが、その後10年で10学部体制に変わっているのが、

大学のその当時の学内状況でした。学生数も、1万2000人だったのが1万8000人にまで増えている状況です。

建物についてですが、法学部ができたと同時に5号館ができていますが、その後、1978年に今の9号館ができるまで、建物は何も建っていないのです。なぜかという、はっきり言って、お金がなかった。「教授一流・学生二流・施設三流」などと茶化されたこともあります。

ただ、その後に学費の値上げがあって、物価スライド制というのを入れたものですから、見る見るうちに学費が上がっていき、あつという間に都内で一番高い大学になってきたのが、この当時のことでした。それに伴い、いろいろな建物の建設計画が始まり、11号館、12号館、13号館、マキムホールと、毎年のように新しい建物ができてきます。かわいそうなことに、工事の車両が行きかう中で4年間過ごしたという学生が結構いるという状況でした。それが当時の学内状況でした。

それで経営学部設立の目的ですが、これは先ほどからお話しされているように、そこに書かれているのは申請書に書いてある文言です。「経営学部が育成する人材は、21世紀のインターネット時代にグローバル化した企業の経済的機能と社会的役割の両面を理解し、国際社会において活躍できるグローバルバリューを有する地球市民である」。これが理念でした。

同時に、「経済学部の経営学科と社会学部の産業関係学科を母体として経営学部を開設し、両学科の伝統を踏まえた学際的な経営学教育を目指す」というのが、難しく言うと、経営学部をつくった白石先生のお気持ちだったと思います。確かに、経済学部の経営学科と社会学部の産業関係学科というのは、はたで見ても文化が違うものですから、非常に面白かった記憶があります。

では経営学部でどんなことをしたかということで、「特徴なプログラム」と書いてみました。BLP、BBLは、今までもお話しされていると思います。それから、英語で展開される専門科目の設置ということ。それから、先ほど尾崎先生がおっしゃっていた派遣留学学部間交流の創設といったことですね。派遣留学の学部間交流で、鳥飼先生が先ほどお話しされていたと思いますが、国際センター。白石先生がこれをやりたくて、国際セ

ンターに何らか掛け合ったらしいのです。しかし、いま忙しいということで、なかなかいい顔をしてもらえなかったらしいです。

あるとき、白石先生が僕のところにきて、「柴さん」と。何を言うかと思ったら、「実はこういう状態だけど、学部独自の交換留学の事務を学部事務室でやってくれないかな」とおっしゃった。僕は何も考えないで「いいですよ」と言った(笑)。それが今になって皆さんを苦しめているところです。ただ、これは実際には、経営学部の中では尾崎先生が一人で全て、一から十までやってくださったので、僕らはあまりしていないのですが、こういったことで、大学間交流は国際センターが、学部間交流はそれぞれの学部の事務室がという流れができてしまったということで、自分は反省している部分もあります。

その他としては、白石先生はアイデアマンで、いろいろなことをしたいということで、先ほど尾崎先生がお話しされたように、ウェルカムキャンプをやりたい。これは、新入生のオリエンテーション期間の中でウェルカムアワーというのがあり、学部が独自に新入生に対して何かをするというのがありますが、その泊まり版をやりたいと白石先生がおっしゃった。おっしゃったのが前年の夏休みぐらいです。

秋には推薦入試の学生に対し書類を出さなくてはいけないというときに、夏にこれをやりたいとおっしゃっていて、すごく苦労した記憶があります。何が苦労したかという、代々木の青少年総合センターでやることになり、先ほど山口先生がおっしゃったように、鍵を配るのから何からユースホステルと一緒にですね。ホテルではないから全てをやらなくてはいけなくて、そこがすごく苦労したのがあります。それと、場所を見つけるのに、一緒に事務をしていた秋山さんという女性がいたのですが、彼女がいろいろなところに電話をかけまくり、やっと見つけたのがここで、ホテルなど当時は取れるような状況ではなかった。これは大変苦労した記憶があります。

その大変だというのが、僕は伝えたいつもりはないですが、ほかの学部事務室の人間に伝わって、ほかでも泊まりをやりたいという声は出てきたけれども学部事務室は絶対やめてくれと反対したという(笑)。「柴さんがあんなに忙しいのだから、

きっと大変だろう」ということで断ったという逸話もありました。

あとは、学部長と新入生のランチミーティング。順番に、20人ぐらいでしょうか、スケジュールを組みながら、お昼に学部長と新入生がご飯を食べながらいろいろなことを語り合うというのでも、白石先生が発案してされたことです。これも食事の手配が大変でした。

それから、首都圏教育懇談会の保護者との懇談会の実施。首都圏の教育懇談会があると思いますが、終わった後に経営学部だけパーティみたいなことをやりたいとおっしゃって、ライフナイダー何かを借りて父兄と先生たちの懇談会みたいなものを始めたというのも、白石先生です。

それから、GPAの本格的な導入や、それを使った成績優秀な学生の表彰制度なども始まりました。それから、白石先生が苦労された中に、「経営学部を支える事務体制」と書きました。何が大変だったかという、実はこの当時というのは、2001年に教務部が大改革をしているのです。それまで、縦割りの学部教務課だったのです。だから、文学部の教務課とか経済学部の教務課ということで、その教務課が、いわゆる教務事務センターのやっている履修・試験関係と教授会のサポートとか、全てを扱うような体制だったのですが、2001年に今のような体制に分かれています。

何を目指したかという、「全学教務委員会が作られて」とありますが、それまで学部ごとに試験規程やら何やらみんなバラバラで、同じ立教の学生だけれど、他学部聴講か何かで同じ科目を取っていてもその扱い方が違うところがあり、そういったものを統一化とか共通化したほうがいいだろう。そういうことで全学教務委員会をつくり、当時教務部長が議長だったのですが、わりと強引にまとめていたという、統一化を目指していた中なのですね。

そこで経営学部ができたときに、独自のプログラムをいろいろやりたいという話になり、典型的だったのは、受け入れていた留学生が本国のスケジュールで、学年末試験を受けずに帰らなくてはいけないとなったのですが、経営学部のほうは、レポートをその代わりにしてカバーしてあげたい。しかし、基本的には筆記試験。そのことで教務と大もめしたことがあります。要するに、それぞれ

勝手なことをやられたら困るということで、筆記試験とするのだったら、留学生だけではなく全員の筆記試験にしてほしい。そういうところで散々やり合った記憶があります。そういったことで経営学部が何か独自にやろうとすると、統一化のところとぶつかり、かなり苦労した記憶があります。

笑話ですが、このとき僕は教務部の副部長もしていて、経営学部の担当として教務事務センターと掛け合っていてやりとりするのですが、当時、大口さんが向こうにいて、やり合っていたら、最後に大口さんに言われたことは、「柴さんの教務部副部長としての見解が知りたい」と言われた。要するに、教務部としては統一化を目指しているのに、そんな勝手にしていいのですかというようなことと言われた記憶があります。

それから、もう一つ事務体制でお話するのは、経営学部を支える事務体制の中の学部管轄人件費の創設です。この当時、学部管轄予算のほか、今あると思いますが、学部管轄人件費というのが各学部に分けられました。それは何かというと、要するに、財政的な面の総量の規制が1つありますが、あとは、学部にし少しフリーハンドにして、自分たちの中で人事を柔軟にやってほしいということもありました。

そういった中で、1つあったのは、経営学部がやろうとしている仕事を学部事務4課が全てやるわけにいかないのです。かといって、学部事務4課だけ増員するわけにいかないというのが大学の政策です。そこで白石先生が考えたのは、学部管轄人件費を使って学部が雇う人たちで、BBLなりBLPなりをやっていること。これは白石先生が思いついてされたことです。

もう一つが、それと関係しますが、公的補助金制度の活用ということです。先ほども話が出ていましたが、現代GPを、経営学部ができる前から確か取っていたと思います。現代GPを取り、それから、2008～2010年に教育GPを取りということで、要するに、学部を回していくには予算的に非常に厳しいので、何とか補助金を取りながら回していきたいと白石先生が苦労されていたということがあります。

ただ、この後、文科省の方針が、単一のプログラムではなく大学全体のプログラムを支援するという形に変わってしまっていて、なかなか採択されな

かったということがありますが、結果として、最終的にはスーパーグローバルの補助金に採択されたというところまでつながっているということで、白石先生がいろいろご苦労されていたことをまとめて見てみました。

ということで、僕が白石先生に初めてお会いしたのは、学生部にいたころで、白石先生はたぶん着任したばかりだと思いますが、学生部の部屋の一番端のソファにふんぞり返って座っていました。僕が横を通ったら「おう」と言われた。そこで初めて白石先生にお会いして、2004年にご一緒に仕事をしたということになっています。

もう一つ、忘れられない思い出は、学部間交流でノルウェー経済大学との協定の調印に白石先生が行くので、「一人では行かせられないから、柴さん行ってくれないか」と尾崎先生にお願いされて、僕は英語ができないからと断ったのですが、かばん持ちでいいからと言われて、ついて行った記憶があります。そのときに、白石先生にものすごく気を遣っていただきました。夜、ご飯を食べにレストランに入って、例えば注文が出てこなかったりして、「じゃあ僕、言ってきます」と言うと、「いやいや、俺が行くからいいよ」と。すごく気を遣ってやさしい白石先生と1週間近くいた記憶があります。そんな思い出があります。

ということで、経営学部がこの先に発展されることを祈っています。(拍手)

12. 前体育会長・加藤睦文学部教授

山口 ありがとうございます。白石先生が立教大学のことを考えられるときに、もう一つの柱として、課外活動、特に体育会活動については、強く思われていたのではないかと思います。自分が白石さんと話したとき、経営学部の話よりも体育会についての話のほうがはるかに多かったような気がします。自分と話していたからかもしれません。

ここからは、体育会に白石先生が込めた思いについて話をさせていただきたいと思います。まずは、白石先生の後を継いで体育会長としてご活躍された加藤先生。野球部のパレードのときに白石先生は乗れないのではないかと僕は若干心配したのですが、ちゃんとパレードのところはご一緒されていたかと思えます。では、加藤先生、お願い

します。

加藤 加藤です。文学部から参りました。この会自体は非常に残念な会だと思っているのですが、お招きいただいたことについては心より感謝申し上げます。

私にとっての白石さんは、先ほど西原さんも言っていました、外から見ていると非常におっかない厳しい方で、しかも大変な能力の方で、そういう意味でも畏怖すべき教授であるはずと思っていました。最初は、全カリの言語の担当で、高校教員対象の説明会というのを入学センターが行って、私はセンター長だったのですが、そのときに初めて白石さんの姿を拝見しました。立教の英語教育ということも壇上で堂々と語られていて、その言葉の力強さ、確信を持った語り、こんな人があるのだと大変驚きましたし、感銘も受けました。

その後、社会学部の産関の入試でベルが鳴らなくて大騒ぎになったときも、いろいろ厳しい交渉をさせていただいて、そのときも、ちゃんと頭の中が整理されていて、相手の言うこともすぐ理解して、的確に断を下す。そして、その後の面倒な、非常に大変な処理も、最短距離で行っていただいたという記憶がありました。

また、2006年改革が間近になって、経営学部がこれからできるというときに、入学センターはほやいていたのですね。2006年改革というのは、2学部でき、またさまざまな新しい学科ができて、何が何だか分からんと言っていたので、僕は当時の山下課長を誘って、一緒に全てのところに話を聞きにいこう。「分からない、分からない」と言っているのではしょうがないから、話を聞きにいこうということで、まずは一番面倒くさそうな白石さんのところに話を聞きにいこうと決めて(笑)、伺いました。

白石先生の頭の中には、これからできる学部のことがきちんと入っていて、また、本当に力強い説明を受けました。一緒に行った山下さんは、「本当によく分かった。すごいですね」ということで、「これから残りのいろいろな学部や学科は私に任せてください」。全部自分で聞きにいこうと言いました。それほどの白石さんの話の力強さがありました。

私はその翌年、2006年改革とか立教の志願者増のことで「AERA」のインタビュー取材を受けました。特に経営学部については、今となっては

自慢話ですが、「これからすごく新しい学部ができる。経営学部という学部である。立教の看板学部になるから、ぜひ注目していただきたい」。立ち上がるか立ち上がらないかのときにそういうことを言いましたが、これは別に私の手柄でも何でもなく、白石先生の話がそれほど力強い話だったということでもあります。

体育会の話に移ると、10年以上体育会長を務められた白石さんから、総長室の中で、私も副総長でしたので呼ばれて、「ちょっと話がある」と。悪い予感がしたのですが、「体育会長をやらないか」ということでした。高岡先生の姿が見えなくなったので申し上げます、「脇に美佳ちゃん付けるから」という話もあり（笑）、とにかくやってほしい。私は、はっきり言って、ビビりました。

白石さんという方のリーダーシップというのは自他共に認めるリーダーシップで、ご本人も大変な自負を持って体育会長をなさっていました。また、周りも余人をもって代え難いというのはこういうことなのかという体育会長でしたので、「まだ自分は1年あるから何でも相談に乗る」とか「脇にはどうのこうの」とか言われても、そう簡単には引き受けられない。OBの方々が現役の学生諸君を愛してくださっている、その立教愛。それも白石さんは完全に受け止め、一体となり、しかし、できることとできないことをきちんとその都度対処されていた。そういう方でしたので、その代わりは本当に務め切れないと思いました。しかし、白石さんの退職も1年後に迫っていましたから、これはやらざるを得ない。

ここからは半分私的な話ですが、私は白石先生のことは大好きで、馬術部長として、体育会長の白石さんを拝見していて、「かっこいいな」と思っていました。立教大学だけではなく立教学院全体のことを白石先生は深く愛しておられた。しかし、お金の面でも、あるいは体育会の指導者の面でも、いろいろOBの方々におんぶにだっこという形でお世話になっている。大学からもお金は出ているけれども、とにかくお金が足りなくて、制度的に苦しいという中で、白石先生は最善の手を打ってこられたと思います。

また、これも体育会の話ですが、非常に多くのお金を毎年支出していただいて、体育会活動奨励金というのが発足したときに、実際の設計はかな

り白石先生が関わっておられたと思います。また、糸魚川理事長という暴れん坊の理事長がいらっしや、「大きなお金を出すから体育会を強くせよ」ということで、かなりまとまった金額が出た複数年度がありましたが、それも白石先生はきちんと受け止めて、「これが立教学院全体を考えて一番いい制度である」ということで、常に広い視野に立って、目の前にあるチャンス、体育会にとってのチャンスを最善の仕方でもって運用してこられたと思います。

私が体育会長をやった2年間は、その制度の上に乗って進めていっただけで、常に白石先生の敷いたレールを走っているなという気持ちがありました。白石先生が敷いたレールというのは、もちろん白石先生の頭の中で設計図どおりに動いていくわけですが、これは先ほどから経営学部のお話を伺っても思ったのですけれども、白石先生の中の完成形というのはもっと広いですね。緻密な設計図と大きな風呂敷が白石先生の頭脳の中にきちんと整っていて、体育会の場合も、その中で今できることは何か、一番大事なことは何かと、核を外さないということで、私などが申し上げるべきことではありませんが、すごく立派な仕事をなさったと思います。

この後、OBの方から話がありますが、51ある各部のOBの方々は本当に学生のことを愛してくださっていて、しかし、その分、当たりもきついですね。そういう方々に対して、本当に白石先生は、ご自身の立教愛というもので向き合っておられたと思います。この立教愛というのは、白石先生ご自身が卒業生であることもありますが、本当に立教大学を愛しておられて、しかし、このままではいけない、本来もっと輝くべき大学であると。そういうお気持ちで体育会長としてもお務めになっていたということを、そばで見ていてひしひしと感じましたし、それを少しでも裏切らないように努めようと思っていました。

もう一度経営学部の話に戻りますと、副総長として、あるいは文学部長として部長会に出ているときに、白石先生はちょうど経営学部長で、白石先生は経営学部に大変自負を持っておられました。そのことになると、うれしくてうれしくて仕方がない。大変な自慢であるということでした。例えば、14号館の前で、2人でたばこを吸ってい

たのですね。そうしましたら、学生が2人、白石先生に「どうも学部長」と言ってお辞儀をして去っていった。これは要するに、1年生全員とランチを共にして語り合ってきた、その大きな成果で、「どうだ、文学部長。あんなこと、おめえのところにあるか」と(笑)、大変な喜びでした。満面の笑顔。そのときは本当に、「ざまあみろ」という感じでした(笑)。「してやったり」という感じでした。

それから、私がとてもいい話としてここでご披露しようとしたことを高岡さんが先に言ってしまったのですが、当時の総長室では、学部が部長会にかけける人事について事前に目を通すということをします。経営学部の人事が出てきましたら、白石さんは、「この人事はすごいのだ。はっきり言って、今の自分は、経営学部の人事に候補者として出て絶対には落ちる。採用なんかしてもらえない」ということを、経営学部の自慢の話として語られました。すごくいい話で、感動しました。その反面、「ほかの学部は駄目だな」と(笑)。そういう表裏がありますが、どれほど経営学部がすごいかということで、要するに末広がりでどんどん発展していくのだ。今の自分が今の人事にかかろうとしたって絶対採用してもらえないのだということでした。

また、ゼミの希望で、いろいろなゼミに入りたい学生がいるけれども、余った人間を自分は引き受けて教育しているのだ。そういうことも、誇張があったかもしれませんが、うれしそうに語られていたことを思い出します。

ですから、立教大学体育会も、白石さんが考えていた理想像にはまだ遠いし、これからいろいろ困難もあると思いますが、経営学部はわりあい体育会のことを応援していただいている学部だと思っているので、ぜひいろいろお助けいただきたいと思っています。恐らく経営学部自体も、白石さんの頭の中にあつた完成形というのはもっとすごいものであつたのではないかと思いますので、ぜひ、今後ますますご発展いただければと思つている次第です。拙い話ですが、私から申し上げることは終わりにしたいと思っています。

皆さんに1つだけ紹介したいのは、季刊『立教』という年に4回出ている雑誌があります。その2009年春号に、白石先生が、見開き2ページ

で、「経営学部学士課程教育の考え方」という文章を書かれています。そこには、尾崎先生が話された、ピタウ大司教からいただいたお言葉が出てきます。「なぜ立教大学に経営学部を設置することが必要なのですか。立教はキリスト教の学校ですよ。建学の精神に立ち戻って、しっかり考えなければいけませんよ」と、やさしい口調ながら厳しく言われた。そのことを今でも忘れることができないと、2009年の時点で書かれています。

また、その建学の精神で立教が最初にできたときのことを、少しだけ読んでみると、「米国の伝統あるリベラルアーツカレッジに現在でも見ることができるようなチャペルが配置された美しいキャンパスと、教員が全ての学生の名前を知っているような親しい環境の中で、キリスト教に基づく教育が行われていたのである」というように、できたころの立教のイメージを語られていて、「時代が変わった今、100年前に戻ることができないのは当然であろう。しかし、今日の社会的要請に応えるとともに、建学の精神に立脚する立教大学らしい特色を持つ経営学部を設置することが、われわれの使命である」と語られています。

そのほかいろいろ、今日お話に出たようなことが、白石先生ご自身の言葉で語られているので、ぜひ経営学部の宝としてこの文章を伝えていただきたいと思います。私からの話は以上です。どうもありがとうございました。(拍手)

13. 体育会 OB：吉井昭一氏

山口 加藤先生、ありがとうございました。続きまして、バスケットボール部OB会の皆さまから、白石先生との関わりなどをお話しいただきたいと思っています。よろしく願ひします。

吉井 バスケット部のOB会長を仰せ付かっている吉井と申します。よろしく願ひいたします。白石先生にはバスケット部の部長を1998年から約20年にわたってさせていただきました。実はうちのバスケット部というのは創部が大正15年で、立教大学と早稲田大学と商大(現一橋大学)が最初に大学のバスケットのリーグをつくつたのです。

それで、バスケット部は、手前みそになります。オールジャパン、天皇杯を7回、それからインカレを6回取っています。私は昭和49年産関

の卒業ですが、そのころは、私たちが関東の一部リーグに所属していた最後のときです。ですから、白石先生が立教大学に入ってきたときには立教大学のバスケット部は一部にいたということで、私たちが卒業して白石さんが大学を卒業されるときには二部に落ちたということです。

ちなみに、白石先生が部長になられたときには、立教大学のバスケット部は五部でした。これが、うちの中では最低のリーグに所属していたときです。白石先生に部長になっていただいて、いろいろ学校のリクルートや何かの関係も変わってきて、約10年かけてやっと関東の二部にまで回復してきたということです。その間に、アスリート選抜入試というものができた。そのときには白石先生が相当頑張ってください、また、その骨格等は白石先生がお考えになり、いろいろ総長とお話しして、こういう制度をつくっていただいた。私たちはそう理解しています。

とは言っても、リクルート等もなかなか。スポーツということがだいぶ変わってきて、われわれのころには、松下とか住金とか新日鉄とかそういうところが実業団チームを持っており、われわれの先輩たちは大学を卒業するとみんなそこに入社していったということですが、今の世代はみんなプロ化になってしまった。実業団はほとんど持っていないくて、お金だけ少し出し、あとは全部プロ化になっていく。そういう大学に対し、なぜ選手が入ってこなくなったかという、結局、昔だと、六大学からそういう会社に入っていくと出世等に関してもかなり影響があった。ところが今は、全くのプロですから、会社の所属はないわけです。

そうすると、要は、六大学に行って卒業して、そのバリューを持って社会に出るという感覚は持っていないくて、むしろ、学費がタダだとか入学金がタダだとか、そういう大学に入ってしまうということで、なかなかわれわれのところにはいい選手が入ってこないのが実情です。この辺の話は白石先生といろいろさせていただきました。

私が白石先生に一番感心したのは合宿です。われわれのころは3週間ぐらい夏の合宿をやっていましたが、白石先生が入ってこられたころは1週間から10日ぐらいやっていて、ずっと合宿所に選手と一緒に寝泊まりしていらっしやっただのすよね。途中から体育会長になったりして学校のほ

うがいろいろ忙しくなったので、顔は出せなくなったのですが、そのころは学生と一緒に、1週間なら1週間、夏休みの一番いいときに、合宿所に寝泊まりしていた。われわれのころは、部長先生がお見えになることはなかなかなかったのですが、ほとんどお見えになっていた。

それから、私が一番覚えているのは、よくお酒を飲んだということです。合宿のときだけではなく常に、白石先生とはお酒を、それこそ夜通しで。サウナでちょっと寝て、また飲んでと、2日間ぐらい通しでお酒を飲んだ思い出があります。最初のころは非常にお酒が強くて、僕も酒は弱いほうではなかったのですが、あの人はいくら飲んでも酔っ払わないなという感覚でした。晩年になると、かなりお酒に酔うようにはなってきました。

私が覚えているのはバスケットだけではなく、運動部は同志社と定期戦をやっていますが、バスケット部は、同志社に行ったり、こっちでやったりで、2年に一遍必ず京都へ行くということがありました。たまたま、同志社のバスケット部のOB会長が月桂冠の大倉さん、大倉酒造の社長をやっていた方だったので、いつも、京都の一力とか、舞子さんがいるようなところへ連れていっていただいて、白石先生もそれを大変喜んで、いつもニコニコしていたのは目に焼き付いています。

それから、バスケットのことはいろいろ話したのですが、いつも私が怒られていたのは、皆さんの前であいさつするときに、あいさつが非常に下手だということで、終わった後にいつも、すし屋で30～40分、「ああいうときにはこのように話すのだ。あんな話し方をしちゃ駄目だ」というような講義を受けたことを、非常によく覚えています。

本当に長い間、20年にわたりご指導していただき、何とかわれわれも一部に戻りました。白石先生に、部長時代に一部チームのゲームのベンチに座っていただきたいと思ったのですが、それがかなわず、二部の段階で先生とお別れすることになったのは、非常に残念に思います。ちなみに、私もがんを10年ぐらい前にやっており、お酒を飲むといつも、「吉井、心配するな。俺がおまえの葬儀委員長をやってやるから、安心していろ」と言われていたのですが、逆になってしまい、私の葬儀委員長がいなくなったので、私もなかなか死ねないのかと思います。白石先生には、本当に長い間、

バスケット部だけではなく各運動部が非常に面倒を見ていただき、感謝をしているのが実情です。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

山口 吉井さん、ありがとうございました。では、松本さん、お願いします。

14. 体育会 OB：松本元氏

松本 皆さん、こんにちは。私は立教大学の男子バスケット部の助監督をやらせていただいている松本と申します。白石先生のことはいま吉井会長にほとんどしゃべっていただいたので、私のほうは個人的に白石先生とのことで覚えていることをお話ししたいと思います。

最初に白石先生にお会いしたのは、先ほど話がありました。部としてどん底だった2000年。2000年から監督をやらせていただいていたので、そのときに初めて白石先生にお会いしました。1年目のときはごあいさつ程度だったと記憶していますが、2年目に、先ほど話があった合宿があり、マネージャーから部長が来るという連絡を受けました。

それまで何度か、部長先生には合宿に表敬訪問では来ていただいていたので、「ああ、そうか」。でも、全部泊まると言っているのを聞きました。われわれスタッフもそんなにいい合宿先ではないので、10畳ぐらいのところに布団を敷いて雑魚寝するような合宿でした。部屋が別にあるわけでもなし、先生もそこに泊まるということで、そこから1週間、寝食を共にしたというのが、本格的なお付き合いの初年度ということになります。

そのときは、白石先生はバスケットのことはたぶんほとんど分からなかったと思います。たぶん言葉も全くお分かりになっていなかったと思います。練習が終わると、われわれスタッフ3人いたのですが、飲みながら、当然バスケットの話になるのです。何時間も。それをずっと黙って横で聞いていらっしゃり、終わりごろになると、「終わった？ もう飲んでもいい？」と言って(笑)、お酒を飲む。それが夜中までというのが毎日続きました。

1年目はそれで終わり、2年目ぐらいから、バスケットのことも勉強されたし、リーグ戦もほとんど全部の試合でベンチに入られましたので、い

ろいろお分かりになってきたのだと思います。また夜のミーティングに、だんだんだんだん最初から参加されるようになってきました。そこで話が出たのが、どうやったら強くなるのだ。大学としては何をすれば強くなるのだという話をよくわれわれに聞いてきました。

今でこそ、体育会のいろいろな制度が整い、本当にいろいろ支援を体育会としていただいているのですが、その当時は、ほとんどそういうものはない状態で、われわれも、何を大学にしてもらえればいいのかということも考えたこともなかったのです。ですから、いろいろ先生とお話する中で、こういうのがあればとか、ああいうのがあればとか、お話をしていき、それをどんどん実現させていってくれる先生です。それもものすごいスピードで。「こういうのがあったらどうだ。では、こういうのを考えてみるよ」と言うと、翌年にそういうものが具体化するような、本当にすごいスピード感だと思っていました。私も会社勤めですが、先生というよりは経営者、もう少し言うとう政治家のような感じで、非常にいろいろ勉強させていただいたのがあります。

あともう一つ、ものすごく記憶があるのは、リーグ戦で、私は監督をやっていたのですが、コーチ等もいろいろ都合があって行けない大事な試合がありました。私がベンチで指揮をとらなければいけなかったのですが、非常に不安で、白石先生も仕事があって来れないということで、ベンチにスタッフは私しかない状態でやらなければいけなかった。メールで先生とやりとりをしたときに、そういう不安げなことを書いたのですかね。次の日、会場へ行ったら、いるのですよね。来てくれている。ベンチで、何も言わず座ってくれていたのですが、非常に頼もしかったという記憶があります。

近年は、バスケット部の部長も外れられましたし、年何回かご一緒して飲むようなことしかありませんでしたが、会うたびに、私も松本といいますので「まっちゃん」と言われていたのですが、「まっちゃんはどうそつきた。こういう制度をつくらしたら日本一に戻れるって言ったじゃねえか」と怒られ(笑)、「ばかだな」というのも何回も言われました。ただ、その後には、「ばかというのは俺の誉め言葉だ」というのを非常に言われ、そう

言いながら飲んでいるから、結局、怒られているのだから褒められているのだからよく分からない状態でその日が終わるというのでした。

いま部は、先ほど二部というのがありました。三部まで落ちています。五部から二部まで上がっていき、今また、ちょっと停滞の時期を迎えています。その状態で先生を見送ることになったのは非常に心苦しいですが、これからまた、戦績だけではなく、先生の理念どおりの、あるべき姿の体育会の部として、学生と一緒に頑張っていくので、天からまた叱咤激励を受けられればと思います。今日はこういう会に参加させていただき、本当にありがとうございました。(拍手)

山口 ありがとうございました。体育会のときもそうですが、白石先生は一人一人のスタッフ、部員と一緒に過ごすことを、たぶんすごく大切にされていたのではないかと思います。ここまでのところで2つの思いについて皆さんから語っていただきました。

それでは、この後 Closing ということで、まずは白石弘子様から一言お願いできればと思います。

白石 どうもこんばんは、白石です。今日はこのような会を開いていただき、ありがとうございました。この会場に着いたら、突然、山口先生から一言と言われ、何も考えないでただ聴きにきた感覚でしたので、何をお話していいか分からないのですが、たくさん盛ってくださった方もいらっしゃるかと思います、たくさんいいお話を聞かせていただきました。

私から見ても、特に最後の10年ぐらいは、120%ぐらいの頑張りで暮らしてきたかと思いますが、具体的に何をやってきたか、私には全く分からないので、こういうところでいろいろな細かい姿を聞かせていただいたのは、大変ありがたいことです。そして、うちに帰ってくると抜け殻同然で、酔っ払っていることが多かったですし、子どもたちから、お兄ちゃんは既に家にいませんが、下の子はまだ一緒に暮らしていて、あまりリスペクトされる感じではない姿がうちでは見られていましたが、亡くなった後、息子が、「俺が死んだら偉大さが分かる」と言っていたという話をポロッとされ、偉大かどうかは分からないけれども、

たくさんのやってきたことというのを聞かされて、私からも彼に伝えたりして、一生懸命やったのだなということは非常に心に残ります。

それゆえに、私の家では、休むか、たまに買い物に行くことはありましたが、二人で出かけるとかゴージャスなランチをすとか旅行するとか、そういうことはほとんどないという感じで暮らしていました。私は、それでもいいかという感じで、あまり不満に思うことはなかったですが、こうやってたくさん皆さまからの温かい思いをいただいたことが、本当に何よりも幸せだと思います。ありがとうございました。(拍手)

15. おわりに

山口 どうもありがとうございました。自分が白石先生とお会いしたのは30年ぐらい前になります。こういう企画をここでやらないといけないことは非常にづらいことですが、自分のふるさとの言葉に、「におい残せよ梅の花」という言葉があります。実は梅の花は、そこで花を咲かせて、そこでにおいを残し、これからいろいろな花が咲く。その役割を果たしていると伝えられています。

白石先生は、この立教大学で経営学部をつくり、私が学部長を引き継いだときに、日本で一番新しい経営学部だということを何度も何度も高校生の前で話しました。その後、実は、立教大学の経営学部に似たような学部が日本の大学で数多くできました。国際化もそうですし、リーダーシッププログラムもそうです。たぶん、白石先生が残したそのにおいが広がって広がって、いろいろな花をいま咲かせていると思います。われわれもこの白石先生の思いにちゃんと応えられるように、今後もしっかり頑張っていきたいと思います。

それでは最後に、西原先生のお祈りでこの会を閉じたいと思います。

西原 それでは、閉会に当たり、最後にご一緒に、しばらくの間、黙とうの時を持ち、祝祷をもってこの会を閉じさせていただきたいと思います。それでは黙とういたしましょう。主イエスキリストの恵み、神の愛、精霊の交わりが私たちと共に、ことに白石先生につながるお一人お一人の上に、また、経営学部につながる一人一人の上に、限りなくありますように。アーメン。